

大和
思想

三章

三章

「全体の構造」を理解する

目次

序文 6

「全体」は「共通の目的を持った人」の
集まりである 11

「全体を構成する全ての人」は
「全体の目的を実現させる活動の一部を
担っている状態」で存在している 18

「全体」は「まとめる側（まとめる立場）」と
「まとめられる側（まとめられる立場）」に
分かれている 24

「全体」は「システム」によって成り立っている
34

「全体を構成する全ての人」を
「まとめる」必要性について 47

「役割分担」と「適材適所」をしっかりと行なう
51

「全体を構成する全ての人」が
「優先順位が一番」を「全体」にする 63

「全体を構成する全ての人」が
「主体性」を持ち、かつ、「互いに協力し合う」
70

「全体を構成する全ての人」が
「自分の役割」をしっかりと果たす 76

「全体を構成する全ての人」をしっかりと育てる
（教育をしっかりと行なう） 81

「全体を統制する」必要性について 89

「全体のルール」をつくる 99

「全体を統制するための教育」をしっかりと行なう
106

「信賞必罰」を行なう 111

「抑止力」を有効に活用する 123

まとめ 135

三章

「全体の構造」 を理解する

序文

※三章で言う「全体」とは、「家族」「友人の集まり」「学校」「会社」「国家」等の、「人間がつくりだす『集団』『組織』『社会』」のことです。

「大和思想」は、「『世の中の全ての人が、自ら率先して、普段自分が関わっている全体をまとめること』によって、『共存共栄の世の中』を実現させ、世の中の全ての人と共に『幸福』になる」という「思想」です。

ですから、「大和思想を実践する」とは、「常に、自ら率先して、普段自分が関わっている『全体』をまとめる」ということです。

また、「大和思想を実践して生きる」とは、「常に、自ら率先して、『普段自分が関わっている全体をまとめるための働きかけ』をして生きる」ということです。

このように、「大和思想」においては、「普段自分が関わっている『全体』をまとめること」が根本的に重要なのですが、実際に「全体をまとめる」ためには、「全体の構造」をしっかりと理解する必要があります。

世の中には、「家族」「友人の集まり」「学校」「会社」「国家」等、様々な「全体」があり、それぞれには、それぞれの「構造」がありますが、『『全体の構造』の中核を成す部分』は、全ての「全体」に共通しています。

「全体をまとめる」ためには、この「全体の構造（全ての『全体』に共通して備わっている『全体の構造の中核を成す部分』）」をしっかりと理解する必要があります。

そこで、三章では、この「全体の構造」について説明したいと思います。

さて、これから説明する「全体の構造」は、言うなれば「全体の設計図」です。

「設計図」とは、例えば、「それを見ながら『机』を作れば『設計図』どおりの『机』ができ、それを見ながら『家』を建てれば『設計図』どおりの『家』が建つ」というものです。

また、「それを見なければ『何をどうすればいいか』が分からないので、『机』を作ることも『家』を建てることもできない」というものです。

もちろん、その「設計」を正確に理解している人であれば、「設計図」を見なくても、「設計図」どおりの「もの」を作ることができます。

ですが、その「設計」を理解していない人が、「設計図」を見ずに「机」や「家」を作ろうと思っても、それは不可能なのです。

それと同じで、いくら「家族」「友人の集まり」「会社」「国家」等の、普段自分が関わっている「全体」をまとめようと思っても、「全体の構造」が分からなければ、「何をどうすればいいか」が分からないので、「全体をまとめること」はできないのです。

ですから、「全体をまとめる」ためには、まず、「全体の構造」をしっかりと理解する必要があるのです。

これから、この「全体の構造」について説明していきますが、これは、世の中の全ての「全体」に共通するものなので、この「全体の構造」をしっかりと理解し、それに従って「『全体をまとめる』ための働きかけ」をすれば、誰でも「普段自分が関わっている『全体』をまとめること」ができます。

人によっては、「『全体の構造』を理解しても、自分には『全体をまとめること』など、とてもできない」と思うかもしれません。

ですが、どれだけ不器用な人でも、「机の設計図」を見ながら根気よく作業を続ければ、「設計図」どおりの「机」が作れますし、「家の設計図」を見ながら根気よく作業を続ければ、「設計図」どおりの「家」を建てることができます。

まして、「机の設計図」を見ながら作業をして「椅子」ができるということはありませんし、「家の設計図」を見ながら作業をして「車」ができるとい

うことはないのです。

ですから、どのような人でも、「全体の構造」をしっかり理解し、それに従って根気よく『全体をまとめる』ための働きかけ」を続ければ、「普段自分が関わっている『全体』をまとめること」ができるのです。

たとえ、理想どおりには、まとめられなくても、「全体の構造」を全く理解していない場合と比べたら、よほど上手く「まとめること」ができるのです。

ですから、これから説明することは、しっかり理解してください。

そして、普段自分が関わっている「全体」を、しっかりまとめてほしいと思います。

さて、それでは、これから、「全体の構造」について説明していきたいと思います。

これから説明することは、それぞれが「全体の構造」の「一部分」なので、それぞれを「断片」と

して捉えるのではなく、「一つの大きな構造」として捉えてください。

また、できれば、それを「イメージ」で捉えてください。

「設計図」は明確であればあるほど、実際の作業は楽になります。

ですから、これから説明することを、じっくり読んで、より明確な「設計図」を手に入れてください。

「全体」は「共通の目的を持った人」の集まりである

それでは、まず、「全体は『共通の目的を持った人』の集まりである」ということについて説明したいと思います。

世の中には、「家族」「友人の集まり」「学校」「会社」「国家」等、様々な「全体」がありますが、それらは全て「『共通の目的を持った人』の集まり」です。

人間は「社会的生き物」なので、様々な「全体」をつくり、その中で生活していますが、どのような「全体」でも、まず、はじめに、「『一人では実現できない目的』を持った人」がいて、それを実現させるために、「『自分と同じ目的』を持った人」を集めて、もしくは、「『自分と同じ目的』を持った人」が自然に集まってつくりだされるのが普通です。

「一人では実現できない目的」を持っていなければ（「『一人では実現できない目的』を実現させたい」と思っていなければ）、誰も「全体」をつくりません。

また、「一人では実現できない目的」を持っていたとしても（「『一人では実現できない目的』を実現させたい」と思っていたとしても）、「同じ目的を持った人」が集まらなければ、「全体」はつくりだされません。

例えば、「家族」には、「家族全員で協力して生きていく」という「目的」がありますが、そのような「目的」（一人では実現できない目的）を持っていないければ（「家族をつくって家族全員で協力して生きていきたい」と思っていないければ）、誰も「家族」をつくりません。

また、そうしたいと思っていたとしても、「『自分と同じ目的』を持った人」が集まらなければ、「家族」はつくりだされません。

また、「友人の集まり」には、「『有意義な時間』を過ごす」「自分にはない『知識』や『感性』に触れる」等の「目的」がありますが、そのような「目的」（一人では実現できない目的）を持っていないければ（「友人をつくって『有意義な時間』を過ごしたい」「自分にはない『知識』や『感性』に触れたい」と思っていないければ）、誰も「友人」をつくりません。

また、そうしたいと思っていたとしても、「『自分と同じ目的』を持った人」が集まらなければ、「友人の集まり」はつくりだされません。

また、「会社」には、「利益を上げ、それを『会社

を構成する全ての人』に分配する」という「目的」がありますが、そのような「目的」（一人では実現できない目的）を持っていなければ（『会社の活動を通じて利益を上げ、それを自分を含む会社を構成する全ての人に分配する活動』をしたい」と思っていないければ）、誰も「会社」をつくりません。

また、そうしたいと思っていたとしても、「『自分と同じ目的』を持った人」が集まらなければ、「会社」はつくりだされません。

また、「国家」には、「国民全員（国家を構成する全ての人）の生活を安定させる」という「目的」がありますが、そのような「目的」（一人では実現できない目的）を持っていなければ（「国家をつかって『自分を含む、国家を構成する全ての人々の生活』を安定させたい」と思っていないければ）、誰も「国家」をつくりません。

また、そうしたいと思っていたとしても、「『自分と同じ目的』を持った人」が集まらなければ、「国家」はつくりだされません。

このように、「一人では実現できない目的」を持っていなければ、誰も「全体」をつくりませんし、「一人では実現できない目的」を持っていたとしても、「同じ目的を持った人」が集まらなければ、

「全体」はつくりだされないのです。

ですから、このことから、「全体」は、『一人では実現できない目的』を実現させるために、『同じ目的を持った人』が集まってつくりだされるもの』だと言えるのです。

つまり、「全体」は『共通の目的を持った人』の集まり』だと言えるのです。

さて、このように、世の中の全ての「全体」は、『共通の目的を持った人』の集まり』なのですが、『全体を構成する全ての人』が持つ『共通の目的』には、分かりづらいものがたくさんあります。

また、『全体を構成する人』の中には、『共通の目的』を意識していない人がたくさんいます。

ですから、『全体』によっては、『共通の目的を持った人』の集まり』であることを認識しづらいものもあります。

ですが、もし『共通の目的』がなかったら、『全体』がつくられることはありませんし、時間と共

にそれぞれの考えが変わり、「共通の目的」がなくなったら、その「全体」は消滅するはずです。

また、人間は、それぞれが「自分の考え」を持った「独立した個人」なので、同じ「全体」に所属していても、それぞれが持つ様々な「目的（『生きる目的』『働く目的』『行動する目的』等）」が全て一致することはありません。

ですが、もし、「その全体を構成する全ての人」が持つ「共通の目的」と同じ「目的」を持っていなかったら、その人は、その「全体」に所属せず別行動をするはずです。

また、「全体に所属している」ということは、その人は、少なからず「その『全体』を必要としている」ということですので、「その『全体』から得るものがある」ということです。

つまり、その人は、「その全体を構成する全ての人」が持つ「共通の目的」と同じ「目的」を、少なからず持っているということです。

ですから、これらのことから、「全体」は「『共通の目的を持った人』の集まり」だと言えるのです。

世の中には、「家族」「友人の集まり」「学校」「会社」「国家」等、様々な「全体（集団、組織、社会）」がありますが、それらは全て「『共通の目的を持った人』の集まり」なのです。

ほとんどの人は、意識したことがないかもしれませんが、これが「全体」であり、「全体」の「本質」なのです。

さて、このように、世の中の全ての「全体」は、「『共通の目的を持った人』の集まり」なのです。

そして、このことから、「全体の構造」の「根本」は、「目的」と「複数の人」だと言えるのです。

「全体の構造」を理解するためには、まず、このことをしっかり理解する必要があります。

「全体」は「『共通の目的を持った人』の集まり」

です。

そして、「全体の構造」の「根本」は、「目的」と「複数の人」なのです。

「全体を構成する全ての人」は 「全体の目的を実現させる活動 の一部分を担っている状態」で 存在している

先ほど説明したように、「全体の構造」の「根本」は、「目的」と「複数の人」ですが、この「複数の人（全体を構成する全ての人）」は、「『全体の目的を実現させる活動』の『一部分』を担っている状態」で存在しています。

「全体」は「『共通の目的を持った人』の集まり」です。

「『一人では実現できない目的』を実現させるために、『同じ目的を持った人』が集まってつくりだされるもの」、それが「全体」です。

ですから、どのような「全体」でも、「全体を構成する全ての人」は「共通の目的」を持っていますし、基本的には、「『全体の目的（共通の目的）を実現させるための働きかけ』をしている状態」で「全体」を構成しています。

中には、「全体を構成している」にもかかわらず、「『全体の目的を実現させるための働きかけ』をしていない人」がいるかもしれません。

ですが、「全体」は「『共通の目的を持った人』の集まり」なので、本来は、「全体を構成する全ての人」が、「『全体の目的（共通の目的）を実現させる』ための働きかけ」をしていなければなりません。

「ただ単に『全体』を構成している」のではなく、「『全体の目的を実現させるための働きかけをしている状態』で『全体』を構成している」のが、「全体を構成する人」の「本来の姿」「あるべき姿」

なのです。

このことから、「全体を構成する人」は、「『全体の目的を実現させる活動』の『一翼』を担う存在」「『全体の目的を実現させる活動』の『一部分』を担う存在」だと言えます。

また、「全体を構成する全ての人」は、「『全体の目的を実現させる』ための働きかけ」を「している、していない」にかかわらず、「『全体の目的を実現させる活動の一部分を担っている状態』で存在している」と言えるのです。

さて、人間は、それぞれが「自分の考え」を持った「独立した個人」なので、「全体」においても、それぞれが「独立した個人」であることに変わりはありません。

ですが、「全体」は「『共通の目的を持った人』の集まり」なので、「全体」においては、「『独立した個人』であると同時に、『全体の目的を実現させる活動』の『一部分』を担っている状態」で存在しています。

この「『独立した個人』であると同時に、『全体の目的を実現させる活動』の『一部分』を担っている状態」をより理解するために、「人間の体を構成する『一つの細胞』と『人間の体全体』の関係」について簡単に説明したいと思います。

「人間の体を構成する『一つの細胞』と『人間の体全体』の関係」は、「『一人の人間』と『人間社会全体』の関係」に、よく似ています。

例えば、眼球を構成する「一つの細胞」は、「一つの独立した細胞」であると同時に、「『眼球の一部分』を担っている」と同時に、「『頭部の一部分』を担っている」と同時に、「『体全体の一部分』を担っている」と言えます。

同じように、人間社会を構成する「一人の人間」は、「一人の独立した個人」であると同時に、「『家族の一部分』を担っている」と同時に、「『勤めている会社の一部分』を担っている」と同時に、「『国家の一部分』を担っている」と同時に、「『人間社会全体の一部分』を担っている」と言えます。

また、人間の体を構成する「一つの細胞」の「存

在」は、一見、それほど重要ではなさそうですが、例えば、眼球を構成する「一つの細胞」が正常に機能しなくなることによって、その影響で、眼球を構成する「他の細胞」も正常に機能しなくなり、その結果「失明」に至ることもありますし、人間の体を構成する一つ一つの細胞が「活発でいい状態」でなければ、その総合体である「人間の体全体」は「活発でいい状態」にならないので、人間の体を構成する「一つの細胞」の「存在」と、その「あり方」は、実際はとても重要だと言えます。

同じように、人間社会を構成する「一人の人間」の「存在」も、一見、それほど重要ではなさそうですが、例えば、「一人の人間」が「自分勝手な生き方」をすることによって、「家庭」が崩壊したり、「職場」が滅茶苦茶になったり、犯罪を犯して「社会の秩序」が著しく乱れたりすることもありますし、人間社会を構成する一人一人が「活発でいい状態」でなければ、その総合体である「人間社会全体」は「活発でいい状態」にならないので、人間社会を構成する「一人の人間」の「存在」と、その「あり方」も、実際はとても重要だと言えます。

このように、人間の体を構成する「一つの細胞」も、人間社会を構成する「一人の人間」も、「『一つ

の独立した存在』であると同時に、『様々な部分や全体の一部分を担っている状態』で存在しているのです。

人間は、それぞれが「自分の考え」を持った「独立した個人」なので、「全体」においても、「独立した個人」であることに変わりはありません。

ですが、「全体」においては、『『独立した個人』であると同時に、『全体の目的を実現させる活動』の『一部分』を担っている状態』で存在しているのです。

「ただ単に存在している」のではなく、『『全体の目的を実現させる活動』の『一部分』を担っている状態』で存在しているのです。

さて、これらのことから分かるように、どのような「全体」においても、「全体を構成する全ての人は、『『全体の目的を実現させる活動』の『一部分』を担っている状態』で存在しているのです。

「全体の構造」の「根本」は、「目的」と「複数の

人」です。

そして、この「複数の人（全体を構成する全ての人）」は、「『全体の目的を実現させる活動』の『一部分』を担っている状態」で存在しているのです。

「全体」は「まとめる側（まとめる立場）」と「まとめられる側（まとめられる立場）」に分かれている

世の中には様々な「全体」がありますが、全ての「全体」は、「まとめる側（まとめる立場）」と「まとめられる側（まとめられる立場）」に分かれています。

「全体」は「『共通の目的を持った人』の集まり」なので、全ての「全体」には、何らかの「目的」があります。

「全体に『目的』がある」ということは、「全体は、その『目的』を実現させる必要がある」ということですが、「全体の目的」を実現させるためには、「全体を構成する全ての人」が、「『まとまり』のある行動」「『統一性』のある行動」をする必要があります。

また、「全体を構成する全ての人」が「『まとまり』のある行動」「『統一性』のある行動」をするためには、「全体をまとめる立場の人（全体をまとめる役）」が必要になります。

また、「全体」の中から「全体をまとめる立場の人（全体をまとめる役）」を選び出すと、それに伴って「まとめられる立場の人」も選ばれることになります。

このように、世の中の全ての「全体」には「目的」があり、「目的」を実現させるためには「全体を構成する全ての人」が「『まとまり』のある行動」「『統一性』のある行動」をする必要があります、そのためには、「全体をまとめる立場の人」が必要になり、そして、「全体をまとめる立場の人」を選び出

すと、それに伴って「まとめられる立場の人」も選ばれることになるのです。

ですから、世の中の全ての「全体」は、「まとめる側（まとめる立場）」と「まとめられる側（まとめられる立場）」に分かれているのです。

さて、このように、世の中の全ての「全体」は、「まとめる側（まとめる立場）」と「まとめられる側（まとめられる立場）」に分かれているのですが、このことをより理解するために、いくつかの「全体」を、「まとめる側（まとめる立場）」と「まとめられる側（まとめられる立場）」に分けてみたいと思います。

例えば、「父、母、子供二人の四人家族」の場合、「まとめる側」は「父と母」で、「まとめられる側」は「子供二人」です。

「友人の集まり」の場合、基本的には皆対等で、「まとめる側」「まとめられる側」という明確な区別はありません。

ですが、何かを決定するときには、必ず誰かが「決定する立場（まとめる側）」になるはずで

ですから、そのときによって、「全体をまとめる

人(まとめる側)」が変わるかもしれませんが、「友人の集まり」も、「まとめる側」と「まとめられる側」に分けて考えることができます。

「会社」の場合、例えば、各「部署」や「チーム」ごとに、それを「まとめる役」がいて、その上にその人達を「まとめる役」がいて、さらにその上にもその人達を「まとめる役」がいて、「会社全体をまとめる立場」に「社長」がいるというように、それぞれの「部署」や「チーム」も「会社全体」も、「まとめる側」と「まとめられる側」に分けて考えることができます。

また、場合によっては、取り組んでいる「プロジェクト」においては「まとめる側」で、所属している「部署」においては「まとめられる側」というように、そのときによって立場が変わることもあります。

ですが、いずれにしろ、取り組んでいる「プロジェクト」も所属している「部署」も、「まとめる側」と「まとめられる側」に分けて考えることができます。

「国家」の場合、大まかに言うと、「まとめる側」は「公務員」で、「まとめられる側」は「公務員以外の国民」です。

ですから、世界には百九十以上の「国家」があり、それぞれの「国家」は、少なからず異なる方法で運営されていますが、いずれの「国家」も、「まとめる側」と「まとめられる側」に分けて考えることができます。

これらのことから分かるように、世の中の全ての「全体」は、「まとめる側（まとめる立場）」と「まとめられる側（まとめられる立場）」に分かれているのです。

「全体」によっては、それぞれの立場があまり明確でなかったり、そのときによって変わったりしますが、全ての「全体」は、「まとめる側（まとめる立場）」と「まとめられる側（まとめられる立場）」に分かれているのです。

さて、このように、世の中の全ての「全体」は、「まとめる側（まとめる立場）」と「まとめられる側（まとめられる立場）」に分かれているのですが、「全体の目的」を実現させる上で、この「観点」を持つことはとても重要です。

なぜなら、先ほど説明したように、「まとめる側

（まとめる立場）」と「まとめられる側（まとめられる立場）」は、明確に分かれていなかったり、そのときによって変わったりするので、この「観点」をしっかりと持っていなければ、誰が「まとめる側（まとめる立場）」で、誰が「まとめられる側（まとめられる立場）」なのかを正確に把握することができないからです。

そして、それができないので、「自分の役割」をしっかりと果たすことができず、「全体の目的」を実現させることができなくなるからです。

「『全体をまとめる立場の人』の役割」と「『まとめられる立場の人』の役割」には、「大きな違い」があります。

「『全体をまとめる立場の人』の役割」には、「最終決定をし、指示を出すこと」があります。

「『まとめられる立場の人』の役割」には、「その指示に従うこと」があります。

このように、「『全体をまとめる立場の人』の役割」と「『まとめられる立場の人』の役割」には、

「大きな違い」「真逆の部分」があるので、誰が「全体をまとめる立場」で、誰が「まとめられる立場」なのかを正確に把握していなかったら、「自分の役割」をしっかり果たすことができず、「全体の目的」を実現させることができなくなるのです。

自分が「全体をまとめる立場」なのに、それに気付かなければ、指示を出すべきときに、指示を出すことができません。

また、「まとめられる立場」なのに、それに気付かなければ、指示に従うべきときに、指示に従うことができません。

このように、「指示を出すべき人」が指示を出さず、「指示に従うべき人」が指示に従わなかったら、「『まとまり』のある行動」「『統一性』のある行動」ができないので、「全体の目的」を実現させることはできなくなるのです。

逆に、常に「全体」を「まとめる側」と「まとめられる側」に分けて考えていれば、常に、誰が「全体をまとめる立場」で、誰が「まとめられる立場」なのかを正確に把握することができます。

そして、常に、それらを正確に把握していれば、常に、「自分の役割」をしっかりと果たすことができます。

そして、常に、それぞれが「自分の役割」をしっかりと果たしていれば、「全体」は、常に「『まとまり』のある行動」「『統一性』のある行動」ができるので、「全体の目的」を実現させることができるのです。

ですから、「全体は『まとめる側(まとめる立場)』と『まとめられる側(まとめられる立場)』に分かれている」という「観点」を持つことは、「全体の目的」を実現させる上で、とても重要なことなのです。

さて、これらのことから分かるように、世の中の全ての「全体」は、「まとめる側(まとめる立場)」と「まとめられる側(まとめられる立場)」に分かれているのです。

「全体の構造」の「根本」は、「目的」と「複数の人」です。

そして、「複数の人(全体を構成する全ての人)」は、「『全体の目的を実現させる活動』の『一部分』を担っている状態」で存在しています。

また、「複数の人(全体を構成する全ての人)」は、「まとめる側(まとめる立場)」と「まとめられる側(まとめられる立場)」に分かれているのです。

ところで、「全体」を「まとめる側(まとめる立場)」と「まとめられる側(まとめられる立場)」に分けて考えるときには、次のことに注意する必要があります。

それは、「『まとめる側』も『まとめられる側』も、『全体を構成する一員』という意味では、皆『対等』である」ということについてです。

「まとめる側」と「まとめられる側」の違いは、あくまで「役割」の違いです。

「全体を構成する全ての人」が、「共通の目的」を実現させるために「役割分担」という意味で分かれたもの。それが、「まとめる側」と「まとめられ

る側」です。

ですから、どちらが「偉い」「偉くない」ということはなく、どちらも、同じ「全体」を支える「重要な存在」であり、「協力関係」にあり、「全体を構成する一員」という意味で「対等な関係」にあるのです。

「役割」が違えば、「責任」の重さも「要求される能力」も違ってきます。ですから、当然「報酬」も違ってきます。ですが、どちらも「同じ『全体』を構成する一員」なのです。

ですから、自分が「まとめる側」だとしても、威張ったり、増長したりしてはいけませんし、「まとめられる側」だとしても、卑屈になったり、弱気になったりしてはいけません。

なぜなら、そのようなことをしていたら、「全体の目的」を実現させることができなくなるからです。

ですから、「全体」を「まとめる側（まとめる立場）」と「まとめられる側（まとめられる立場）」に分けて考えるときには、このことに注意する必要

があるのです。

「全体」は「システム」によって 成り立っている

※「システム」という言葉を的確に表現するのは、とても難しいのですが、あえて表現すると、ここで言う「システム」とは、「『目的を実現させる』ための仕組み」という意味です。

また、「全体のシステム」とは、「『全体の目的を実現させる』ための仕組み」という意味です。

世の中には様々な「全体」がありますが、全ての「全体」は、「システム」によって成り立っています。

世の中の全ての「全体」には「目的」があります

が、「全体の目的」を実現させるためには、「全体を構成する全ての人」が、「『全体の目的を実現させるために必要となる一定の行動（行なうべきこと）』を行ない続ける」必要があります。

例えば、「家族全員で協力して生きていく」という「家族の目的」を実現させるためには、「家族全員」が、「『自分勝手な行動』はしない」「最低限は『気遣い』をする」「『自分の役割』をしっかりと果たす」等の、「『その家族の目的を実現させるために必要となる一定の行動（行なうべきこと）』を行ない続ける」必要があります。

また、「有意義な時間を過ごす」「自分にはない『知識』や『感性』に触れる」等の「友人の集まりの目的」を実現させるためには、「友人の集まりを構成する全ての人」が、「『協調性』を持って接する」「『ウソ』をつかない」「『約束』を守る」等の、「『その友人の集まりの目的を実現させるために必要となる一定の行動（行なうべきこと）』を行ない続ける」必要があります。

また、「学校」「会社」「国家」、その他、どのような「全体」においても、「その全体の目的」を実現させるためには、「その全体を構成する全ての人」

が、「『その全体の目的を実現させるために必要となる一定の行動（行なうべきこと）』を行ない続ける」必要があります。

このように、「『全体の目的』を実現させるためには、全体を構成する全ての人が、『その全体の目的を実現させるために必要となる一定の行動（行なうべきこと）』を行ない続ける必要がある」のですが、これは、「『全体の目的』を実現させるためには、全体を構成する全ての人が、『その全体のシステム（その全体の目的を実現させるための仕組み）』に従って行動し続ける必要がある」ということです。

また、基本的に、「『全体の目的を実現させる』ための活動」は、全て「全体のシステム」に従って行なわれるので、「全体のシステム」が、「整合性」のある、「欠陥」のないものであれば、「全体の目的」を実現させることができますが、「整合性」のない、「欠陥」のあるものであったら、「全体の目的」を実現させることはできません。

つまり、「『全体の目的を実現させること』ができるかどうか」は、「全体のシステム」の「あり方」

によって決まるのです。

このように、世の中の全ての「全体」には「目的」がありますが、「全体の目的」を実現させるためには、「全体を構成する全ての人」が『『全体のシステム』に従って行動し続ける』必要がありますし、『『全体の目的を実現させること』ができるかどうか』は、「全体のシステム」の「あり方」によって決まるのです。

ですから、これらのことから、「全体は『システム』によって成り立っている」と言えるのです。

さて、「システム（『目的を実現させる』ための仕組み）」とは、単純に言うと、『『こうすることによって、こうなる』』『『こうなることによって、そうなる』、そして『『そうなることによって、目的が実現される』』というようなもので、例えば次のようなものがあります。

○家族の人間関係を一定の状態に保つためのシステム

「『定期的に家族全員で食事をしたり、旅行をしたりすることによって、家族全員のコミュニケーションを促す』、そして『家族全員のコミュニケーションが促されることによって、家族全員の人間関係が一定の状態に保たれる』」

○サービス業における、顧客を増やすためのシステム

「『店の宣伝をすることによって、客を店に呼び込む』『店に来た客に質の高いサービスを提供することによって、客が満足する』、そして『客が満足することによって、また店に来るようになる（顧客が増える）』」

○会社等における、理想的な人材を獲得するためのシステム

「『採用試験を行ない、理想的な人間を選ぶ』『選んだ人間をさらに面接し、自分の目で相手の能力や人間性を見抜く』、また『待遇を良くし、理想的な人材が満足できる環境をつくる』、そして『それらを行なうことによって、理想的な人材を獲得する』」

このような「『目的を実現させる』ための仕組み」が、ここで言う「システム」なのです。

また、この「システム」と「本質」は同じですが、「『全体の目的を実現させるため』に機能している」のが「全体のシステム」です。

「全体のシステム」は、ただの「システム」と比べると規模が大きく複雑です。

例えば、「会社のシステム」は、「生産システム」「業務の効率化をはかるための仕組み」「顧客を増やすためのシステム」「自社にふさわしい社員を採用するためのシステム」「社員を育てるためのシステム」等、いくつもの「システム（仕組み）」が互いに作用し合って、一つの大きな「会社のシステム」を形成しています。

また、「国家のシステム」は、「税の仕組み」「教育システム」「社会保険制度」「民意を政治に反映させるための仕組み」、法律等の「秩序を維持するための仕組み」、三権分立等の「権力を分散させるための仕組み」等、様々な「システム（仕組み）」が互いに作用し合って成り立っています。

また、「教育システム」は、さらに「一定水準以上の教員を採用するためのシステム」「適切な教材を提供するための仕組み」等から成り立っているというように、それぞれの「システム」は、さらにいくつもの「システム」が、互いに作用し合って成り立っています。

このように、「全体のシステム」は規模が大きく、いくつもの「システム（仕組み）」が互いに作用し合って成り立っているのです。

特に、「大きな会社」や「国家」等の「『規模が大きな全体』のシステム」は、非常に複雑で、非常に多くの「システム（仕組み）」が、互いに作用し合って成り立っているのです。

さて、このような「『規模が大きな全体』のシステム」を考えると、「全体のシステム」は、とても複雑に思えますが、「全体のシステム」の「本質」は、いたってシンプルです。

「全体のシステム」の「本質」は、「『全体の目的を実現させるために行なう必要がある全てのこと』を『効率良く』行なうこと」です。

ですから、「全体のシステム」をつくるときは、「『全体の目的を実現させるために行なう必要がある全てのこと』を『効率良く行なう』方法」を考え、それを「システム化（パターン化）」します。

例えば、「家族のシステム（『家族をまとめる』ためのシステム）」をつくるときは、「どうすれば『効率良く』『家族全員で協力して生きていくこと』ができるか」「どうすれば『家族において行なう必要がある全てのこと』を『効率良く』行なうことができるか」を考え、それを「システム化（パターン化）」します。

例えば、「掃除」に関しては、「第一週の日曜日に部屋を掃除し、第二週の日曜日にトイレと風呂場を掃除し、第三週の日曜日に廊下と玄関を掃除し、第四週の日曜日に台所を掃除する」、「年末に大掃除をする」と決め、「システム化（パターン化）」して行なえば、「前はいつ掃除したか」「今日はどこを掃除しようか」「今日は掃除をしようか、それともやめようか」等を考える必要がなくなります。

そして、「今日は第一週の日曜日だから部屋を掃除する」「今日は第二週の日曜日だからトイレと風呂場を掃除する」というように、何も考えずに「機

械的に行動する」だけで、常に、それぞれを一定の状態に保つことができます。

また、「人間関係」に関しては、「『おはよう』『おやすみ』『行ってきます』『ただいま』等の挨拶や、『ありがとう』『ごめんなさい』という一言は必ず言う」「定期的に『家族全員で食事をする』」と決め（システム化して）、「家族全員」が必ずそれを行なうようにすれば、仕事や勉強に追われて「コミュニケーション」をとる時間が減ったとしても、特別な努力をすることなく、「家族の人間関係」を一定の状態に保つことができます。

「人間関係」も、「こういうときは、こう言う」「そういうときは、そう言う」、「こういうときは、こうする」「そういうときは、そうする」と、一度「システム」をつくってしまえば、後は、それに従って「機械的に行動する」だけで、常に一定の状態に保つことができるのです。

このような発想で、「『家族』において行なう必要がある全てのこと」を「システム化（パターン化）」すれば、「システム化」しない場合よりも、はるかに「効率良く」全てのことを行なうことができるのです。

また、「会社のシステム（『会社をまとめる』ためのシステム）」をつくるときも、「どうすれば『効率良く』『利益を上げ、それを会社を構成する全ての人に分配すること』ができるか」「どうすれば『会社において行なう必要がある全てのこと』を『効率良く』行なうことができるか」を考え、それを「システム化（パターン化）」します。

例えば、「在庫管理」に関しては、「会社に保管できる数量（最大で何個保管できるか）」と「会社に最低限保管しておく必要がある数量」を正確に把握し、「残りの在庫が何個になったら、何個発注するか」を決めて（システム化して）「在庫管理」を行なえば、いちいち在庫の数量を数えたり、「何個発注するか」を考えたりする必要がなくなります。

何も考えなくても、在庫の数量が発注すべき数量まで減ったときに、「機械的に発注する」だけで、常に在庫をきらすことなく、一定量を確保しておくことができるのです。

また、「新入社員の育成」に関しては、「入社当日に、『会社で働くとはどういうことか』や『社員の義務と責任』等について教える」「入社後三ヶ月は、仕事で必要となる『知識』と『技術』を教え

る」「入社後三ヶ月から六ヶ月の間は、先輩のサポート等を通じて仕事に慣れさせる」「入社後六ヶ月からは、普通の社員と同じように業務を行なう」と決めて（システム化して）新入社員を育成すれば、毎回「何をどのように教えるか」等を考える必要がありませんし、「新入社員の育成」の「ノウハウ」も蓄積されるので、より上手に行なえるようになります。

ですから、「新入社員の育成」も「システム化」すれば、「機械的にそれを行なう」だけで、毎回、「新入社員」を一定の期間内に一定の状態に育てることができるのです。

「会社」においても、このような発想で、「会社において行なう必要がある全てのこと」を「システム化（パターン化）」すれば、「システム化」しない場合よりも、はるかに「効率良く」全てのことを行なうことができるのです。

さて、これらのことから、「『全体のシステム』とは、どのようなものか」が理解できると思います。

また、「全体が『システム』によって成り立っていること」も理解できると思います。

世の中の全ての「全体」には「目的」がありますが、「全体の目的」を実現させるためには、「全体を構成する全ての人」が、「『全体の目的を実現させるために必要となる一定の行動（行なうべきこと）』を行ない続ける」必要がありますが、それは、「『全体のシステム』に従って行動し続ける」必要があるということです。

また、基本的に、「全体の活動」は、全て「全体のシステム」に従って行なわれるので、「『全体の目的を実現させること』ができるかどうか」は、「全体のシステム」の「あり方」によって決まります。

ですから、これらのことから、「全体は『システム』によって成り立っている」と言えるのです。

世の中には、「家族」「友人の集まり」「学校」「会社」「国家」等、様々な「全体」があり、「全体」によっては、「システム」というほどのものはない場合もありますが、それらは全て「システム」によって成り立っているのです。

さて、ここまで、「全体は『共通の目的を持った人』の集まりである」「『全体を構成する全ての人』は『全体の目的を実現させる活動の一部分を担っている状態』で存在している」「全体は『まとめる側（まとめる立場）』と『まとめられる側（まとめられる立場）』に分かれている」「全体は『システム』によって成り立っている」ということについて説明しました。

これら四つが、「全体の構造」の「基礎」を成す部分なのです。

分かりやすく言うと、「全体の構造」の「基礎」は、「目的」「複数の人」「システム」です。

そして、「複数の人(全体を構成する全ての人)」は、「『全体の目的を実現させる活動』の『一部分』を担っている状態」で存在し、また、「まとめる側（まとめる立場）」と「まとめられる側（まとめられる立場）」に分かれているのです。

世の中には、様々な「全体の構造」があります

が、全ての「全体の構造」は、この「基礎」の上に成り立っているのです。

「全体を構成する全ての人」を「まとめる」必要性について

※ここで言う「『全体を構成する全ての人』をまとめる」とは、「『全体を構成する全ての人』を『全体の目的を実現させることができる状態』にする」という意味です。

ここまで、「全体の構造」の「基礎」について説明してきました。

ここからは、「『全体を構成する全ての人をまとめる』ために必要なこと（『全体を構成する全ての人をまとめる』ためのシステム）」について説明し

ていきたいとします。

先ほど説明したように、「全体の構造」の「基礎」は、「目的」「複数の人」「システム」です。

この中で、「複数の人」と「システム」は、「『全体の目的を実現させること』ができる状態」である必要がありますが、「複数の人（全体を構成する全ての人）」は、それぞれが「自分の考え」を持った「独立した個人」なので、放っておいたら、それぞれが思い思いに行動して、「『全体の目的を実現させること』ができる状態」にはなりません。

ですから、「全体の目的」を実現させるためには、「全体を構成する全ての人を『全体の目的を実現させることができる状態』にまとめる」必要があります。

人によっては「結果さえ良ければいい」と言っていて、「人をまとめること」を考えませんが、「全体を構成する全ての人」がまとまっていなかったら、「全体の實力」を十分に発揮させることができないので、「いい結果」を得ることはできません。

ですから、「全体の目的」を実現させるためには、「全体を構成する全ての人」を、積極的に「まとめる」必要があるのです。

「全体の目的」を実現させるためには、「全体」を「単なる『個人』の集合体」ではなく、「『全体の目的を実現させるための働きかけを行なっている人』の集合体」にする必要があるのです。

さて、実際に、「『全体を構成する全ての人』をまとめる」ためには、次のことをしっかり行なう必要があります。

「役割分担」と「適材適所」をしっかりと行なう

「全体を構成する全ての人」が「優先順位が一番」を「全体」にする

「全体を構成する全ての人」が「主体性」を持ち、かつ、「互いに協力し合う」

「全体を構成する全ての人」が「自分の役割」をしっかりと果たす

「全体を構成する全ての人」をしっかりと育てる(教育をしっかりと行なう)

また、「『全体を構成する全ての人』をまとめる」ためには、少なからず「全体を統制する」必要がありますが、「全体を統制する」ためには、次のことをしっかりと行なう必要があります。

「全体のルール」をつくる

「全体を統制するための教育」を行なう

「信賞必罰」を行なう

「抑止力」を有効に活用する

これらをしっかりと行なうことによって、「『全体を構成する全ての人』をまとめること」ができるのです。

これらは、「『全体を構成する全ての人をまとめる』ために必要なこと」ですが、どのような「全体」においても必要なことなので、これは、「『全体を構成する全ての人をまとめる』ためのシステ

ム」だと言えます。

「全体の構造」の「基礎」は、「目的」「複数の人」「システム」です。

そして、これが、「『複数の人（全体を構成する全ての人）をまとめる』ためのシステム」なのです。

これから、この「『全体を構成する全ての人をまとめる』ためのシステム」について、順番に説明していきたいと思います。

「役割分担」と「適材適所」をしっかりと行なう

それでは、まず、「『役割分担』と『適材適所』をしっかりと行なう」ということについて説明したいと思います。

世の中には、様々な「全体」がありますが、どのような「全体」でも、「全体の目的」を実現させるためには、『全体の目的を実現させる』ために行なう必要がある全てのことを「円滑に」「効率良く」行なう必要があります。

また、そのためには、『全体の目的を実現させる』ために行なう必要がある全てのことを「全体を構成する全ての人」で「分担」して（役割分担をして）行なう必要があります。

「役割分担」をせず、「全体を構成する全ての人」が、常に一緒になって同じ作業をしていたら、作業が「円滑に」「効率良く」行なわれず、はかどらないので、「全体の目的」を実現させることができなくなります。

ですから、「全体の目的」を実現させるためには、『全体の目的を実現させる』ために行なう必要がある全てのことを「全体を構成する全ての人」で「分担」して（役割分担をして）行なう必要があるのです。

例えば、「家族」において、「家族全員で協力して生きていく」という「目的」を実現させるためには、「『家族全員で協力して生きていく』ために行なう必要がある全てのこと」を「家族全員」で「分担」して（役割分担をして）行なう必要があります。

「夫が収入を得ることに専念して、妻は家事に専念する」、子育てにおいて、「一方が子供を叱ったら、もう一方は優しく接する(フォローをする)」、「男性が力仕事をして、女性が力を必要としない仕事をする」等、「『家族全員で協力して生きていく』ために行なう必要がある全てのこと」を「家族全員」で「分担」して行なえば、それら全てを「円滑に」「効率良く」行なうことができます。

もちろん、「役割分担」の仕方は「家族」によって違いますし、それぞれの「役割」は変わることもあります。

また、「役割分担」をすると、一人が作業をしているときに別の人には休憩しているというように、一見、行動が「バラバラ」に見えることもあります。

ですが、「役割分担」をせず、「家族全員」が、常に一緒になって同じ作業をしていたら、それは間違いなく「非効率」なのです。

そして、「非効率なやり方」で全てのことを行なっていたら、全ての作業がはかどらず、「行なうべきこと」が、どんどんたまっていくので、いずれ「家族全員で協力して生きていくこと」ができなくなるのです。

ですから、「家族全員で協力して生きていく」ためには、「『家族全員で協力して生きていく』ために行なう必要がある全てのこと」を「家族全員」で「分担」して行なう必要があるのです。

また、「会社」においても「役割分担」は必要です。

例えば、開発部、製造部、販売部がある「会社」で、「会社を構成する全ての人」で開発を行ない、その作業が終わってから「会社を構成する全ての人」で製造を行ない、その作業が終わってから「会社を構成する全ての人」で販売を行なっていたら、それは「非効率」どころではありません。

「会社を構成する全ての人」を、それぞれの「能力」「長所、短所」「関心の有る、無し」「将来性」等に基づいてそれぞれの部署に配置し（役割分担をし）、それぞれの部署内でも、それぞれの「役割」「責任」「権限の範囲」等を明確にして（役割分担をして）作業をするからこそ、「『会社』の全ての作業」を「円滑に」「効率良く」行なうことができるのです。

「会社」には、「利益を上げ、それを『会社を構成する全ての人』に分配する」という「目的」がありますが、「役割分担」をしなければ、そのために必要な全てのことを、「円滑に」「効率良く」行なうことなどできません。

ですから、「会社」においても、「会社の目的」を実現させるためには、「『会社の目的を実現させる』ために行なう必要がある全てのこと」を「会社を構成する全ての人」で「分担」して行なう必要があるのです。

また、「国家」においても同じことが言えます。

「国家」には、「国民全員（国家を構成する全ての

人)の生活を安定させる」という「目的」があるので、「『国民全員の生活を安定させる』ために行なう必要がある全てのこと」を「国民全員」で「分担」して(役割分担をして)行なう必要があります。

「国家」においては、「政治活動」「経済活動」「教育」等、「『国民全員の生活を安定させる』ために行なう必要がある全てのこと」は、実際に、「職業」等のかたちで「分担」して行なわれています。

ですが、重要なのは、「『国民全員の生活を安定させるために行なう必要がある全てのこと』を『国民全員』で『分担』して行なうこと」なので、「困っている人を助ける」「自然や環境を守る」といった、「職業以外のこと(収入につながらないこと)」でも、必要なら「国民全員」で「分担」して行なわなければなりません。

「国家」は、規模がとてつもない大きな「全体」なので、「役割分担」をまったくせず「国民全員」が常に同じ活動をしていたら、「国民全員の生活を安定させること」など不可能です。

ですから、「国家」においても、「国民全員の生活を安定させる」ためには、「『国民全員の生活を

安定させる』ために行なう必要がある全てのこと」を「国民全員」で「分担」して行なう必要があるのです。

これらのことから分かるように、どのような「全体」でも、「全体の目的」を実現させるためには、「『全体の目的を実現させる』ために行なう必要がある全てのこと」を「全体を構成する全ての人」で「分担」して（役割分担をして）行なう必要があるのです。

「役割分担」をせず、「全体を構成する全ての人」が、常に一緒になって同じ作業をしていたら、それは間違いなく「非効率」なのです。

そして、「非効率なやり方」で「全体の活動」をしていたら、いずれ、「全体の目的」を実現させることはできなくなるのです。

ですから、どのような「全体」でも、「全体の目的」を実現させるためには、「役割分担」をしっかりと行なう必要があるのです。

さて、このように、「全体の目的」を実現させるためには「役割分担」をしっかりと行なう必要があるのですが、実際に「役割分担」をするときには、同時に、「適材適所」もしっかり行なう必要があります。

「適材適所を行なう」とは、「『全体を構成する全ての人』を、その人の『適性』や『能力』に応じて、その人にふさわしい『役割』に配置する」「それぞれの『役割』に、その『役割』にふさわしい人を配置する」ということです。

「全体の目的」を実現させるためには、「役割分担」をしっかりと行なう必要がありますが、せっかく「役割分担」をしても、それぞれの「役割」に、「その『役割』をしっかりと果たせる人」「『その役割を果たすために必要な能力』を備えた人」を配置しなければ、「全体の實力」は十分に発揮されません。

そして、「全体の實力」が十分に発揮されないの
で、「全体の目的」を実現させることができません。

ですから、「役割分担」をするときは、それぞれの「役割」に、「その『役割』をしっかりと果たせる人」「『その役割を果たすために必要な能力』を備えた人」を配置する必要があります。つまり「適

材適所」をしっかりと行なう必要があるのです。

さて、この「適材適所」を行なうためには、次のことをしっかりと行なう必要があります。

「適材適所」とは、「『全体を構成する全ての人』を、その人の『適性』や『能力』に応じて、その人にふさわしい『役割』に配置すること」「それぞれの『役割』に、その『役割』にふさわしい人を配置すること」なので、「適材適所」を行なうためには、「全体を構成する全ての人」の「長所、短所」「向き、不向き」「能力」「人間性」「将来性」等を「しっかり見抜く」必要があります。

人は、見た目には「実力」がありそうでも実際はなかったり、逆に、「実力」がなさそうでも実際はあったりします。

また、「自分の発言に『責任』を持っている人」や「発言内容の『正否』を重視する人」は、言葉を慎重に選ぶため、必然的に「口べた」になり、逆の人は、必然的に「口が上手くなる」ので、「『話し方』が上手い」「『説明の仕方』が鮮やかである」というだけでは、「能力の有無」は分かりません。

ですから、「適材適所」を行なうためには、その人の外見だけでなく、「発言」や「行動」にも注目し、また、人は口では何とでも言えるので、「発言」と「実際の行動」が一致しているかをよく観察し、そして、ある程度時間をかけて、その人の「長所、短所」「向き、不向き」「能力」「人間性」「将来性」等を「しっかり見抜く」必要があるのです。

また、「適材適所」と言うからには、当然、自分自身も「適切な役割」を担う必要があります。

つまり、「自分の役割」を考えるときも、自分の「長所、短所」「向き、不向き」「能力」「人間性」「将来性」等をよく考え、「自分にふさわしい役割」を担う必要があります。

人によっては、それらを考えずに、「自分が関心がある役割」を担おうとしますが、いくら関心があっても、「その『役割』をしっかり果たすこと」ができなければ、「全体の實力」は十分に発揮されません。

ですから、「自分の役割」を考えるときも、自分の「長所、短所」「向き、不向き」「能力」「人間性」

「将来性」等をよく考え、「自分に適した役割」を担う必要があるのです。

また、同じ理由から、「自分より『その役割』にふさわしい人」がいるときは、その人に、「その『役割』を譲る」必要があるのです。

また、もし「人事異動」をした後に、「移動した人」が「以前と同じように実力を発揮すること」ができなくなったら、それは「『人事異動を行なった人』の責任」と考え、可能な限り、「その人が実力を十分に発揮できる役割」に「再移動」するか、もしくは、「移動する前の役割」に戻した方がいいと言えます。

なぜなら、人は、「適切な役割」に配置されてこそ実力を十分に発揮できるのですし、「全体に『実力を十分に発揮できていない人』がいる」ということは、「その『全体』は実力を十分に発揮できていない」ということだからです。

ですから、「人事異動」や「人の配置」をするときは細心の注意を払い、その結果が良くないときは、「再移動」することも考えた方がいいのです。

「適材適所」は、それくらい慎重になってこそ、しっかり行なうことができるのです。

これらのことをしっかり行なうことによって、「適材適所」をしっかりと行なうことができるのです。

「役割分担」をするときは、このようなことに注意して、「適材適所」もしっかり行なう必要があるのです。

さて、これらのことから分かるように、「全体の目的」を実現させるためには、「役割分担」と「適材適所」をしっかりと行なう必要があるのです。

「役割分担」をしなければ、「『全体の目的を実現させる』ために行なう必要がある全てのこと」を「円滑に」「効率良く」行なうことはできません。

また、「適材適所」を行なわなければ、「『全体の實力』を十分に発揮させること」はできません。

ですから、「全体の目的」を実現させるためには、

「役割分担」と「適材適所」をしっかりと行なう必要があるのです。

「全体を構成する全ての人」が 「優先順位が一番」を「全体」にする

※ここで言う「『優先順位が一番』を『全体』にする」とは、「自分のことよりも『全体のこと』を優先させて行動する」「『全体のこと』を最優先に考えて行動する」という意味です。

どのような「全体」でも、「全体の目的」を実現させるためには、「全体を構成する全ての人」が、「優先順位が一番」を「その全体」にする必要があります。

「全体を構成する全ての人」が「優先順位が一番」を「自分」にしていたら、「全体を構成する全ての人」の「行動」に「まとまり」「統一性」が得られなくなるので、「全体の目的」を実現させることができなくなります。

例えば、集団スポーツの「チーム」において、「選手全員」が「優先順位が一番」を「チーム」にしないで「自分」にしていたら、「チームワーク」が得られず、「『チームの実力』を十分に発揮すること」ができないので、試合に勝つことができません。

また、「家族」において、「家族全員」が「優先順位が一番」を「家族」にしないで「自分」にしていたら、「家族」がまとまらないので、いずれ「協力して生きていくこと」ができなくなります。

また、「会社」において、「会社を構成する全ての人」が「優先順位が一番」を「会社全体」にしないで「自分」にしていたら、「会社を構成する全ての人」の「行動」に「まとまり」「統一性」が得られず、「『会社の活動』の効率」が下がるので、「利益を上げること」に影響がでます。

また、「国家」において、「国家を構成する全て

の人」が「優先順位の一歩」を「国家」にしないで「自分」にしていたら、「対立」や「争い」が増えるので、「国民全員の生活を安定させること」ができなくなります。

このように、どのような「全体」でも、「全体を構成する全ての人」が「優先順位の一歩」を「自分」にしていたら、「全体を構成する全ての人」の「行動」に「まとまり」「統一性」が得られなくなるので、「全体の目的」を実現させることができなくなるのです。

ですから、どのような「全体」でも、「全体の目的」を実現させるためには、「全体を構成する全ての人」が、「優先順位の一歩」を「全体」にする必要があるのです。

さて、どのような「全体」でも、「全体を構成する全ての人」は、「優先順位の一歩」を「全体」にする必要があるのですが、『優先順位の一歩』を『全体』にしなければならない」と言うのと、人によっては「束縛されている印象」を受け、「嫌な気分」になるかもしれません。

ですが、「全体」には「目的」があり、「全体の目的」を実現させるためには、「全体を構成する全ての人」が「『まとまり』のある行動」「『統一性』のある行動」をする必要があります。「『まとまり』のある行動」「『統一性』のある行動」をするためには、「全体を構成する全ての人」が「優先順位が一番」を「全体」にする必要があるので、「全体」に所属している以上は、全ての人が、「優先順位が一番」を「全体」にしなければなりません。

「全体」に所属せず一人で行動するなら、「優先順位が一番」を「自分」にし、「自分の思うまま」「気の向くまま」に行動しても、何の問題もありません。

ですが、「全体に所属している」のに、そのように行動したら、「全体を構成する全ての人」の「行動」に「まとまり」「統一性」が得られなくなり、「全体の目的」を実現させることができなくなるので、そのような行動は許されないのです。

「全体」に所属すると、「一人ではできないこと」ができるようになる一方、必然的に「行動の自由度」は減ります。

「全体に所属すること」と「『優先順位が一番』を『自分』にすること」は両立し得ないのです。

ですから、「『行動の自由度』が減るのは絶対に嫌だ」という人は、「全体」に所属しないで一人で行動するしかありません。

「家族をつくと『行動の自由度』が減るから嫌だ」という人は、「家族」をつくらず、一人で生きていくしかありませんし、「友人と集まると『行動の自由度』が減るから嫌だ」という人は、一人で過ごすしかありません。

また、「学校に通うと、学びたいことが自由に学べないから嫌だ」という人は、一人で勉強するしかありませんし、「会社で働くと、やりたい仕事ができないから嫌だ」という人は、個人で仕事をするしかありません。

また、「国家の中で生活すると、『行動の自由度』が減るから嫌だ」という人は、誰もいない山奥かジャングルか無人島で、一人で生きていくしかないのです。

「『全体』に所属し『全体を構成する一員』として行動するか、それとも『全体』に所属せず、一人で行動するか」は、それぞれが決めることです。

ですが、「全体に所属する」以上は、全ての人が、「優先順位が一番」を「全体」にしなければならないのです。

さて、これらのことから分かるように、「全体の目的」を実現させるためには、「全体を構成する全ての人」が、「優先順位が一番」を「全体」にする必要があるのです。

世の中の全ての「全体」には「目的」がありますが、「全体の目的」を実現させるためには、「全体を構成する全ての人」の「行動」に「まとまり」「統一性」が必要になります。

そして、「全体を構成する全ての人」の「行動」に「まとまり」「統一性」をもたらすためには、「全体を構成する全ての人」が、「優先順位が一番」を「全体」にする必要があるのです。

ですから、どのような「全体」でも、「全体を構成する全ての人」は、「優先順位が一番」を「全体」にする必要があるのです。

「『優先順位が一番』を『全体』にする」というのは、「自分だけが『優先順位が一番』を『全体』にする」ということではありません。

「全体をまとめる立場の人」も「まとめられる立場の人」も「男性」も「女性」も「年長者」も「年少者」も、「全ての人」が『優先順位が一番』を『全体』にする」ということです。

つまり、これは、「全体を構成する全ての人」に「公平」な「ルール」なのです。

「全体の目的」を実現させるためには、「全体を構成する全ての人」が、この「公平」な「ルール」に従う必要があるのです。

「全体を構成する全ての人」が 「主体性」を持ち、かつ、「互いに協力し合う」

※ここで言う「主体性」とは、「自分の『意志』と『判断』で行動しようとする態度」という意味です。

「全体の目的」を実現させるためには、「全体を構成する全ての人」が「主体性」を持ち、かつ、「互いに協力し合う」必要があります。

「全体」には「目的」がありますが、「『全体の目的』を実現させるための活動」を行っていると、様々な「問題」や「困難」が起こります。

また、「全体」を取り巻く「状況」や「環境」は、常に少なからず変化しています。

ですから、「全体の目的」を実現させるためには、

「全体」は、様々な「問題」や「困難」や『状況』や『環境』の変化に、素早く、的確に、そして臨機応変に対処する必要があります。

そして、「全体」が、様々な「問題」や「困難」や『状況』や『環境』の変化に、素早く、的確に、臨機応変に対処するためには、「全体を構成する全ての人」が「主体性」を持つ必要があります。

「主体性」がある人は、「『問題』や『困難』が起きたとき」や『状況』や『環境』が変化したときに、自分で「何をすべきか」を考え、判断し、行動できます。

また、「主体性」がある人は、「役割分担」が明確でなかったり、「自分の役割」を聞かされていなかったりしても、自分で「自分の役割」を考え、見つけ、それを行なうことができます。

また、「主体性」がある人は、「自分の役割（与えられた仕事）以外のこと」でも、もし必要なら、率先してそれを行なうことができます。

ですから、「全体を構成する全ての人」が「主体

性」を持っていれば、その「全体」は、様々な「問題」や「困難」や『状況』や『環境』の変化」に、素早く、的確に、臨機応変に対処することができますし、それができるので、その「全体」は、「発展」するスピードが早く、「安定」もしているのです。

一方、「主体性」がない人は、「自主的」に行動できません（指示されなければ行動できません）。

また、「主体性」がない人は、「言われたこと」しか行ないませんし、逆に、「言われたこと」なら、「それは正しいか」「本当に必要か」等を考えずに行なってしまいます。

また、「主体性」がない人は、「自分」をしっかり持っていないので、周りの人に流されて、「全体」にとって本当に必要な「発言」や「行動」をすることができません。

ですから、「全体を構成する全ての人」が「主体性」を持っていなかったら、その「全体」は、様々な「問題」や「困難」や『状況』や『環境』の変化」に、素早く、的確に、臨機応変に対処することができませんし、活動のスピードが遅く、「安定」

もしていないのです。

「全体を構成する全ての人」には、それぞれの「役割」がありますが、「その『役割』に関すること」「その『役割』を取り巻く状況」を一番正確に把握できるのは、「その役割の人」です。

どのような「役割」でも、「『その役割の人』にしかならないこと」「『その役割の人』にしか気付けないこと」が必ずあるのです。

ですから、「全体の目的」を実現させるためには、「全体を構成する全ての人」が「主体性」を持ち、自分の頭で「何をすべきか」「それは必要か、必要でないか」「『より良く行なう』ためにはどうすればいいか」等を考え、判断し、行動する必要があるのです。

つまり、「全体を構成する全ての人」が「主体性」を持つ必要があるのです。

また、「全体の目的」を実現させるためには、「全体を構成する全ての人」が「主体性」を持つだけ

でなく、「互いに協力し合う」必要があります。

たとえば、「全体を構成する全ての人」が「主体性」を持っていたとしても、「自分のこと」だけを考えたり行動していたり、「自分の考え」にこだわり過ぎたりしていたら、「自分の作業」は「はかどる」かもしれませんが、周りの人との「連携」がうまくとれなくなるので、「『全体の活動』の効率」は下がります。

そして、「『全体の活動』の効率」が下がるので、「『全体の實力』を十分に発揮させること」ができなくなり、「全体の目的」を実現させることができなくなります。

ですから、「全体の目的」を実現させるためには、「全体を構成する全ての人」が、「互いに協力し合う」必要があるのです。

これらのことから分かるように、「全体の目的」を実現させるためには、「全体を構成する全ての人」が「主体性」を持ち、かつ、「互いに協力し合う」必要があるのです。

さて、このように、「全体の目的」を実現させる

ためには、「全体を構成する全ての人」が「主体性」を持ち、かつ、「互いに協力し合う」必要があるのです。

「全体を構成する全ての人」が「主体性」を持っていなかったら、「全体」は、様々な「問題」や「困難」や「『状況』や『環境』の変化」に、素早く、的確に、臨機応変に対処することができません。

また、「全体を構成する全ての人」が互いに協力し合わなかったら、「連携」がうまくとれないので、「『全体の活動』の効率」が下がります。

ですから、「全体の目的」を実現させるためには、「全体を構成する全ての人」が「主体性」を持ち、かつ、「互いに協力し合う」必要があるのです。

人間は、それぞれが「自分の考え」を持った「独立した個人」ですが、それは、全ての人には、本質的に「主体性」を持っているということです。

ですから、その特性を生かし、「『全体を構成する全ての人』が『主体性』を持ち、かつ、互いに協力し合って『全体の活動』に取り組んでいる状態」

こそ、「全体」の「本来の姿」、「理想の姿」だと言えるのです。

「全体を構成する全ての人」が 「自分の役割」をしっかりと果たす

※ここで言う「『自分の役割』をしっかりと果たす」とは、人に見られていても、見られていなくても、人に認められても、認められなくても、忙しくても、疲れていても、周りの人が「自分の役割」を果たしていなくても、「自分は『自分の役割』をしっかりと果たす」という意味です。

どのような「全体」でも、「全体の目的」を実現させるためには、「全体を構成する全ての人」が「自分の役割」をしっかりと果たす必要があります。

人によっては、必要以上に周りの目を気にしたり、「誰も認めてくれない」と言ったりして、「自分の役割」を果たそうとしません。

また、目先のことだけを考えて「楽」をしようとしたり、「怠け心」から「それを行なえない理由」を考え、言い訳したりして「自分の役割」を放棄します。

また、安易に「自分一人なら『役割』を果たさなくても大丈夫だろう」「自分がやらなくても、誰かがやってくれるだろう」と考え、「自分の役割」を果たしません。

ですが、どのような理由があろうと、「自分の役割」をしっかりと果たさなかったら、「全体の實力」は、「その人の働きの不足分」は確実に発揮されなくなりません。

また、「自分の役割」をしっかりと果たさない人がいると、周りの人が、その人の分まで頑張らなければならないになるので、周りの人が不満を持ち、「全体のまとまり」が得られなくなります。

また、「自分の役割」をしっかりと果たさない人がいると、周りの人の負担が増え、次第に周りの人も、「自分の役割」を果たせなくなります。

ですから、「自分の役割」をしっかりと果たさない人がいると、それが原因で、「全体の目的」を実現させることができなくなることもあるのです。

「全体の目的」を実現させるためには、「全体の實力」を十分に発揮させる必要があります。

そして、「全体の實力」を十分に発揮させるためには、「全体を構成する全ての人」が「自分の役割」をしっかりと果たす必要があるのです。

つまり、どのような「全体」でも、「全体の目的」を実現させるためには、「全体を構成する全ての人」が「自分の役割」をしっかりと果たす必要があるのです。

さて、「全体の目的」を実現させるためには、「全体を構成する全ての人」が「自分の役割」をしっかりと果たす必要があるのですが、「全体を構成する

人が『自分の役割』をしっかりと果たす」のは、本来は、当然過ぎるほど当然のことです。

「全体」は「『共通の目的を持った人』の集まり」なので、「『全体の目的を実現させるための働きかけをしている状態（自分の役割をしっかりと果たしている状態）』で『全体』を構成している」のが、「全体を構成する人」の「本来の姿」「あるべき姿」なのです。

本来は、「全体を構成する全ての人」は、「義務」と「責任」の意識から、当然のこととして、「自分の役割」をしっかりと果たさなければならないのです。

「全体」によっては、「自分の役割」が分かりづらいこともあります。

ですが、「全体」は「『共通の目的を持った人』の集まり」なので、どのような「全体」でも、「全体を構成する全ての人」には、必ず何らかの「役割」があります。

「家族」「友人の集まり」「会社」「国家」、その他、

どのような「全体」でも、「全体を構成する全ての人」には、必ず「役割」があるのです。

たとえ分かりづらくても、よく考えれば「自分の役割」が分かるはずですし、具体的には分からなくても、「自分がやるべきこと」は少なからず分かるはずなのです。

ですから、「全体を構成する全ての人」は、たとえ分かりづらくても、「自分の役割」を考え、探し、しっかり果たさなければならぬのです。

「全体の目的」を実現させるためには、「全体の實力」を十分に発揮させる必要があります。

そして、「全体の實力」を十分に発揮させるためには、「全体を構成する全ての人」が「自分の役割」をしっかり果たす必要があるのです。

つまり、「全体の目的」を実現させるためには、「全体を構成する全ての人」が「自分の役割」をしっかり果たす必要があるのです。

「全体を構成する全ての人」を しっかり育てる（教育をしっかり 行なう）

※ここで言う「しっかり育てる（教育をしっかり行なう）」とは、単に「知識」「技術」等を「教える（伝える）」ということではなく、「様々な手段を用いて、相手を『全体における自分の役割をしっかり果たせる状態』にする」という意味です。

先ほど説明したように、「全体の目的」を実現させるためには、「全体を構成する全ての人」が「自分の役割」をしっかり果たす必要があるのですが、「自分の役割」をしっかり果たすために必要となる「知識」「技術」等は、放っておいて自然に身に付くわけではありません。

ですから、「全体の目的」を実現させるためには、「全体を構成する全ての人」に、それらをしっかり教え、「『全体における自分の役割をしっかり果

たせる状態』に育てる」必要があります。

例えば、「家族」において、「『家族全員』で協力して生きていく」という「目的」を実現させるためには、「家族全員」をしっかりと育てる必要があります。

子供に、「家族」における「自分の役割」をしっかりと果たすために必要となる「知識」「技術」等を教え、それらをしっかりと身に付けさせなければ、子供は、いつまでたっても、「家族における『自分の役割』をしっかりと果たせる状態」になりません。

また、場合によっては、子供をしっかりと育てないことによって、子供が「自分勝手な人間」に育ち、成長するに従って親の言うことを聞かなくなり、「家族」のことなど全くかえりみなくなることもあります。

また、夫婦間でも、「家族」における「自分の役割」をしっかりと果たすために必要となる「知識」「技術」等を、互いに教え合い、学び合わなければ、夫婦共に成長することができないので、様々な「困難」を乗り越えられるようになりません。

これらのことから分かるように、「家族全員」を「家族における『自分の役割』をしっかりと果たせる状態」に育てなければ、いずれ、「『家族全員』で協力して生きていくこと」はできなくなるのです。

ですから、「『家族全員』で協力して生きていく」ためには、「家族全員」が互いに教え合い、学び合って、「家族全員」をしっかりと育てる必要があるのです。

また、「会社」においても、「利益を上げ、それを『会社を構成する全ての人』に分配する」という「目的」を実現させるためには、「社員全員」を「会社における『自分の役割』をしっかりと果たせる状態」に育てる必要があります。

人によっては、「自分で覚える」とか「昔の人は自主的に学んだけど、最近の人は言われなければ学ぼうとしない」と言って、あまり「教えること（育てること）」をしません。もし、「教えること（育てること）」を全くしなかったら、社員は、「『自分の役割』をしっかりと果たせる状態」になりません。

また、「社員全員の能力」は低いより高い方がいいですし、「新入社員」はなるべく早く成長した方が、「会社」にとっていいはずです。

「新入社員」が十年かけて「一人前」に育つより、五年で「一人前」に育つ方が、「会社」にとっていいのです。

また、「社員全員」がしっかり育たなければ、「会社を発展させること」も「様々な『困難』を乗り越えること」もできません。

つまり、「社員全員」をしっかり育てなければ、「会社」は、いずれ、「会社の目的」を実現させることができなくなるのです。

ですから、「会社」においても、「会社の目的」を実現させるためには、「社員全員」をしっかり育てる必要があるのです。

その仕事に関する「知識」と「技術」はもちろんのこと、必要なら「一般常識」「人間性」、その他どのようなことでも積極的に教え、「社員全員」を「会社における『自分の役割』をしっかり果たせる状態」に育てる必要があるのです。

また、「国家」においても、「国民全員（国家を構成する全ての人）の生活を安定させる」という「目的」を実現させるためには、「国民全員」をしっかりと育てる必要があります。

どの「国家」でも、「政治活動」「経済活動」「文化活動」「社会活動」等、『国民全員の生活を安定させる』ために行なう必要がある全てのことは、その国の「国民」が分担して行なっています。

ですから、もし、「国民全員」が『国家における自分の役割』をしっかりと果たせる状態」でなかったら、「社会」も「経済」も「文化」も発展しませんし、「国民全員の生活を安定させること」も「国家を『いい状態』で存続させること」もできません。

ですから、「国家」においても、「国民全員の生活を安定させる」という「目的」を実現させるためには、「国民全員」を「国家における『自分の役割』をしっかりと果たせる状態」に育てる必要があるのです。

また、このことは、「友人の集まり」のような「全

体」にも当てはまります。

「友人の集まり」には、「有意義な時間を過ごす」「自分にはない『知識』や『感性』に触れる」等の「目的」がありますが、それを実現させるためには、「『友人の集まり』を構成する全ての人」が、「『協調性』を持って接する」「『ウソ』をつかない」「『約束』を守る」等の、「『その友人の集まりの目的を実現させる』ために必要なこと」をしっかりと行なう必要があります。

そして、そのためには、「『その友人の集まり』を構成する全ての人」を「それらをしっかりと行なえる状態」に育てる必要があります。

「『友人の集まり』を構成する全ての人」が、誰に教わらなくても、互いに「協調性」を持って接し、「ウソ」をつかず、「約束」を守るというように、「自分の役割」をしっかりと果たしているなら問題はありません。

ですが、そうでないのに互いに何も教えず、学びもしなかったら、「『その友人の集まり』を構成する全ての人」は、いつまでたっても、それらができないままです。

そして、いつまでたっても、それらができないので、いつまでたっても、「『その友人の集まりの目的』を実現させること」ができないのです。

ですから、「友人関係」において、相手に「口うるさく」「説教がましく」教えるのは良くありませんが、それでも、「『協調性をもって接すること』『ウソをつかないこと』『約束を守ること』等の必要性」や「それらを行なうコツ」等を、互いに教え合い、学び合って、「『友人の集まり』を構成する全ての人」を「友人の集まりにおける『自分の役割』をしっかりと果たせる状態」に育てる必要があるのです。

さて、これらのことから、どのような「全体」でも、「全体の目的」を実現させるためには、「全体を構成する全ての人」を、「『全体における自分の役割をしっかりと果たせる状態』に育てる」必要があることが理解できると思います。

人によっては、「人間は放っておいても育つ」と言うかもしれませんが、放っておいて育つのは「身体」だけで、「知識」「技術」等が身に付き、「『自分の役割』をしっかりと果たせる状態」に育つわけで

はありません。

また、どのような「全体」でも、「『全体を構成する人』を簡単に入れ変えること」はできません。

つまり、「全体の目的」は、基本的に、「その全体を構成する人の力」のみで実現させなければならないのです。

ですから、「全体を構成する全ての人」をしっかり育てることは、「全体の目的」を実現させる上で、とても重要なことなのです。

それは、「全体の目的」を実現させるための「要」とも言えるものなのです。

「全体の目的」を実現させるためには、「全体を構成する全ての人」が「自分の役割」をしっかり果たす必要があります。

ですが、「自分の役割」をしっかり果たすために必要となる「知識」「技術」等は、放っておいて自然に身に付くわけではないのです。

ですから、どのような「全体」でも、「全体の目的」を実現させるためには、「全体を構成する全ての人」をしっかり育てる必要があるのです。

「全体を統制する」必要性について

※ここで言う「統制」とは、「『全体を構成する全ての人』の『あり方』と『行動』に『統一性』をもたらすための働きかけ」という意味です。

また、「全体を統制する」とは、「『全体を構成する全ての人』の『あり方』と『行動』に『統一性』をもたらす」という意味です。

「全体を統制する」と言うと、「高圧的」「強制的」な印象を受けるかもしれませんが、「統制」とは、必ずしも、そのような意味で使われる言葉ではありません。

もし、「統制」が「正当性のない活動」において行なわれるなら、それは「高圧的」「強制的」、さらには「弾圧」になるかもしれません。

ですが、ここで言う「全体を統制する」とはそういう意味ではなく、「『全体を構成する全ての人』の『あり方』と『行動』に『統一性』をもたらす」という意味です。

すでに説明したように、世の中の全ての「全体」は、「システム」によって成り立っています。

また、「全体の目的」を実現させるためには、「全体を構成する全ての人」が、「全体のシステム」に従って行動する必要があります。

ですから、どのような「全体」でも、「全体の目的」を実現させるためには、「全体を構成する全ての人」の「あり方」と「行動」を、「『全体のシステム』に従っている状態」にする必要があります。つまり、「全体を統制する」必要があります。

「全体を構成する人」といっても、それぞれは「自分の考え」を持った「独立した個人」なので、何の

働きかけもしないで放っておいたら、その「あり方」と「行動」は、「『全体のシステム』に従っている状態」になりません。

ですから、どのような「全体」でも、「全体の目的」を実現させるためには、少なからず「統制」する必要があるのです。

さて、この「統制」ですが、「統制」には「強弱」があり、「全体」によって必要とする「統制の強弱」は違います。

また、その「強弱」によって、「得られるもの」と「得られないもの」があります。

例えば、「弱い統制」を必要とする「全体」に「友人の集まり」があります。

「友人の集まり」には、基本的に、「統制」と言えるほどのものではありません。

また、それがなく「気楽」でいられるところに、「友人の集まり」の良さがあると言えます。

ですが、「友人の集まり」のように「統制が弱い全体」は、「統一性のある行動」をするのが難しいので（あまり『統制』がとれていないので）、何か「大きな問題」が起きたときに、それに対処するのは非常に困難です。

また、そのときになって、急に「統制」を強めようとしても、それを行なうのは簡単ではありません。

一方、「友人の集まり」とは対照的な「強い統制」を必要とする「全体」に、「軍隊」があります。

「軍隊」は、「銃弾」や「砲弾」が飛び交う「命の危険」がある状況下で「統一性のある行動」をする必要性から、必然的に「統制」が強くなります。

ですから、それこそ上官の命令に背いたり、「全体の秩序を著しく乱す行動」をしたりしたら、その場で殺されることもあります。

「軍隊」は、このように非常に「統制」が強いので、「銃弾」や「砲弾」が飛び交う戦場においても、未だかつて経験したことがないような大災害時においても、「統一性のある行動」をすることができ

るのです。

ですが、逆に、それだけ「統制」が強いので、その中で「気楽さ」や「安らぎ」を得ようとしても、それは簡単ではないのです。

このように、「統制」には「強弱」があり、それによって「得られるもの」と「得られないもの」があるのです。

「統制」を強めると、「統一性」が得られる一方、「気楽さ」「安らぎ」、また「客観的視点」「多様な考え」「多様なアイディア」等を得るのが難しくなります。

逆に、「統制」を弱めると、「気楽さ」「安らぎ」「客観的視点」「多様な考え」「多様なアイディア」等が得られる一方、「統一性」を得るのが難しくなるのです。

さて、このように「統制」には「強弱」があり、その「強弱」によって「得られるもの」と「得られないもの」があるので、『統制の強弱』をどのよ

うにするか」は、「全体の目的」を実現させる上でとても重要になります。

「『統制の強弱』をどのようにするか」とは、別の言い方をすると、「『統一性と自由のバランス』をどのようにするか」ということですが、「統制」は、「全体の目的」を実現させるためにするものなので、そのバランスは、「『その全体の目的を実現させること』ができる状態」に設定する必要があります。

人によっては、「統制」を強めれば、それだけで「全体の目的」を実現させることができると思うかもしれませんが、そうではありません。

例えば、経済において、「計画経済（政府による『統制』が強く、『経済活動の自由度』が低い経済システム）」を採用した国より、「自由主義経済（政府による『統制』が弱く、『経済活動の自由度』が高い経済システム）」を採用した国の方が、経済的に発展したことから分かるように、「統制を強めること（自由度を低くすること）」が、必ずしも「『全体の目的』を実現させること」につながるわけではないのです。

「全体の目的」を実現させるためには、様々な「出来事」や「『状況』や『環境』の変化」に、素早く、的確に、臨機応変に対処する必要がありますが、そのためには、「全体を構成する全ての人」が、「主体性」を持って「自主的」に行動する必要がありますが、「統制」を強めると、それをするのが難しくなります。

また、「全体」を「発展」させるためには、「客観的視点」「多様な考え」「多様なアイデア」が必要になりますが、「統制」を強めると、それらを得るのも難しくなります。

また、人間には、それぞれの「考え」や「生き方」があるので、それらを見捨て「統制」を強めると反発が起きます。

ですから、「統制」を強めるだけでは、「全体の目的」を実現させることはできないのです。

どのような「全体」でも、「全体の目的」を実現させるためには、少なからず「統制」する必要がありますが、このように「『統一性』と『自由』の

バランス」が悪かったら、「全体の目的」を実現させることはできないのです。

ですから、「統制の強弱（『統一性』と『自由』のバランス）」は、あくまで、「『その全体の目的を実現させること』ができる状態」に設定する必要があるのです。

また、「全体を統制する」上で、とても重要なことがあります。

それは、「『全体を統制する』ためには、『最終決定権を持つ人』は一人でなければならない」ということです。

これは、「軍隊」のように「『強い統制』を必要とする全体」においては、当然のこととして理解されていると思いますが、それ以外の、どのような「全体」においても言えることです。

どのような「全体」でも、「最終決定権を持つ人（最終決定をし、指示を出す人）」が複数いたら、「統一性のある行動」はできません。

一つの「全体」に、Aさんの指示に従う人と、B

さんの指示に従う人がいるようでは、「統一性のある行動」はできないのです。

ですから、どのような「全体」でも、「最終決定権を持つ人」は一人でなければならないのです。

これは、「全体を統制する」上で根本的に重要な、「全体を統制する」ための「鉄則」なのです。

さて、これが、ここで言う「統制」なのです。

そして、どのような「全体」でも、「全体の目的」を実現させるためには、少なからず、この「統制」をする必要があるのです。

「全体」は「システム」によって成り立っているので、「全体の目的」を実現させるためには、「全体を構成する全ての人」が、「全体のシステム」に従って行動する必要があります。

ですが、人間は、それぞれが「独立した個人」なので、何の働きかけもしないで放っておいたら、「『全体のシステム』に従っている状態」にはなら

ないのです。

ですから、どのような「全体」でも、「全体の目的」を実現させるためには、少なからず「統制」する必要があるのです。

さて、どのような「全体」でも、「全体の目的」を実現させるためには、少なからず「統制」する必要があるのですが、実際に「全体を統制する」ためには、次の四つのことをしっかり行なう必要があります。

「全体のルール」をつくる

「全体を統制するための教育」をしっかりと行なう

「信賞必罰」を行なう

「抑止力」を有効に活用する

これらをしっかりと行なうことによって、「全体を統制すること」ができるのです。

そこで、これから、これらについて順番に説明していきたいと思います。

「全体のルール」をつくる

※ここで言う「ルール」とは、「人間の『あり方』と『行動』を規定するもの」という意味です。

また、「全体のルール」とは、「『全体を構成する全ての人』の『あり方』と『行動』を規定するもの」という意味です。

先ほど説明したように、「全体を統制する」とは、「『全体を構成する全ての人』の『あり方』と『行動』に『統一性』をもたらす」ということですが、実際に、そうするためには、まず、はじめに、「『全体を構成する全ての人』の『あり方』と『行動』を規定するもの」、つまり「全体のルール」をつくる必要があります。

「全体を構成する人」といっても、それぞれは「自分の考え」を持った「独立した個人」なので、「全体のルール」がなければ、それぞれが思い思いに行動して、「全体を構成する全ての人」の「あり方」と「行動」は、「統一性がない状態」になります。

ですから、「全体を統制する」ためには、まず、はじめに、「全体のルール」をつくる必要があるのです。

さて、「全体を統制する」ためには、「全体のルール」をつくる必要があるのですが、「全体のルール」をつくるのは「全体を統制する」ためであり、「全体を統制する」のは「全体の目的」を実現させるためです。

ですから、世の中には様々な「ルール」がありますが、基本的に、全ての「ルール」は、『その全体の目的』を実現させる」ために機能しています。

例えば、「テーブルマナー（テーブルマナーという『ルール』）」がありますが、それは、「快適に食事をする」ため、「快適に食事をする」という「目

的」を実現させるために機能しています。

「テーブルマナー」には、「食べ物を口に含んだまましゃべらない」「食事中は騒がない」等様々なものがあり、それは家庭や文化によって違いますが、いずれにしろ、それらは、「快適に食事をする」という「目的」を実現させるために機能しているのです。

また、スポーツにも「ルール」がありますが、スポーツの「ルール」も、(広い意味での)「スポーツを楽しむ」という「目的」を実現させるために機能しています。

スポーツの「ルール」には、「簡単にできないことを行なう楽しさ」や「困難を克服することで得られる充実感」を得るためのものや、試合を「円滑」に進めるためのもの等がありますが、それらは、いずれも、(広い意味での)「スポーツを楽しむ」という「目的」を実現させるために機能しているのです。

また、「会社」には、「行動に関するルール」や「服装や髪型に関するルール」がありますが、それらは全て、「利益を上げ、それを『会社を構成する全ての人』に分配する」という「会社の目的」を実現させるために機能しています。

また、「国家」には、「法律」という「ルール」がありますが、「法律」も、「国民全員の生活を安定させる」という、「国家の目的」を実現させるために機能しています。

このように、世の中には様々な「ルール」がありますが、それらは全て、「『その全体の目的』を実現させる」ために機能しているのです。

さて、このように、「全体のルール」は、「『その全体の目的を実現させる』ために機能すべきもの」なので、「全体のルール」をつくるときは、「『その全体の目的を実現させる』ために有効に機能するルール」をつくる必要があります。

例えば、「テーブルマナー」をつくったとしても、それが「あまりにも細かすぎるルール」であったり、逆に「あまりにも大ざっぱなルール」であったりしたら、「快適に食事をする（『快適に食事をする』という『目的』を実現させること）」ができなくなります。

ですから、「テーブルマナー」をつくるとしたら、「細かすぎず」、「大ざっぱすぎず」、「適度なもの」

をつくる必要があります。

つまり、「『快適に食事をするという目的を実現させる』ために有効に機能するルール」をつくる必要があります。

同じように、「会社」や「国家」においても、「必要のないルール」や「間違ったルール」をつくったら、「全体の活動の効率」が下がったり、「全体を構成する全ての人」の「まとめり」が得られなくなったりするので、「全体の目的」を実現させることができなくなります。

ですから、「会社」や「国家」においても、「ルール」をつくるときは、「とりあえずつくればいい」ということではなく、あくまで、「『全体の目的を実現させる』ために有効に機能するルール」をつくる必要があるのです。

たとえ「間違ったルール」でも、一度つくったら、「全体を構成する全ての人」が、その「ルール」に従うことになります。

ですから、意図的でなくても「間違ったルール」をつくったら、「全体の目的」を実現させることはできなくなるのです。

ですから、「全体のルール」をつくるときは、「『全体の目的を実現させる』ために有効に機能するルール」をつくる必要があるのです。

さて、これらのことから、「『全体のルール』とはどのようなものか」が理解できると思います。

また、「『全体を統制する』ためには『全体のルール』をつくる必要があること」も理解できると思います。

普段、あまり「ルール」を意識していない人は、「ルール」と言うと、堅苦しく思うかもしれませんが、多くの人が無人島かどこかの「『ルール』が全くない土地」に移り住み、「共同生活」をすとしても、まず、はじめに「ルール」をつくるはずで

す。なぜなら、「ルール」がなければ、「秩序を維持すること」も「生活を安定させること」もできな

いからです。つまり、「共同生活」をすること自体ができないからです。

よく考えれば分かることですが、「家族」「友人の集まり」「学校」「会社」「国家」、その他、どのような「全体」でも、「全体のルール」があるからこそ、「一定の秩序（全体の統制）」が保たれているのです。

人間は、それぞれが、「自分の考え」を持った「独立した個人」です。

ですから、「全体のルール」がなければ、「全体を構成する全ての人」が思い思いに行動し、「全体を構成する全ての人」の「あり方」と「行動」は、「統一性がない状態」になるのです。

ですから、「全体を統制する」ためには、まず、はじめに、「全体のルール」をつくる必要があるのです。

「ルール」というほどのものではなくても、『『暗黙のルール』のようなもの』は必ずつくる必要が

あるのです。

「全体を統制するための教育」 をしっかりと行なう

※ここで言う「『全体を統制するための教育』をしっかりと行なう」とは、「『全体のルールに従う必要性』をしっかりと理解させる」という意味です。

先ほど説明したように、「全体を統制する」ためには、まず、はじめに、「全体のルール」をつくる必要がありますが、「全体のルール」をつくったら、次に、「全体を統制するための教育」をしっかりと行ないます。

つまり、「全体を構成する全ての人」に、「『全体のルール』に従う必要性」をしっかりと理解させます。

「全体を構成する人」は、「全体のルール」をつくただけでは、その「ルール」に従いません。

ですから、「全体を統制する」ためには、「全体のルール」をつくるだけでなく、「全体を統制するための教育」をしっかりと行なう必要があるのです。

さて、「全体を統制する」ためには、「全体を統制するための教育」をしっかりと行なう（「全体のルールに従う必要性」をしっかりと理解させる）必要があるのですが、そもそも、「『全体のルール』に従う必要性」「『全体のルール』に従わなければならない理由」とは何なのでしょう？

「『全体のルール』に従わなければならない理由」は、「全体」には「目的」があり、「全体の目的」を実現させるためには、「全体を構成する全ての人」が「『まとめり』のある行動」「『統一性』のある行動」をする必要があります、そのためには、「全体を構成する全ての人」が「全体のルール」に従う必要があるからです。

「全体を構成する全ての人」が「全体のルール」に従わなかったら、「『まとまり』のある行動」「『統一性』のある行動」はできません。

そして、「『まとまり』のある行動」「『統一性』のある行動」ができないので、「『全体の活動』の効率」が下がり、「全体の實力」を十分に発揮させることができなくなり、「全体の目的」を実現させることができなくなるのです。

ですから、「全体を構成する全ての人」は、「全体のルール」に従わなければならないのです。

これが、「『全体のルール』に従わなければならない理由」なのです。

さて、これが、「『全体のルール』に従わなければならない理由」「『全体のルール』に従う必要性」なので、「全体を統制する」ためには、これを「全体を構成する全ての人」に説明し、しっかり理解させる必要があります。

「『必要性』をしっかり理解させること」、これが、

「全体を統制する」ためには必要なのです。

「必要性」をしっかりと理解させず、単に「『全体のルール』に従いなさい」と言うだけでは、「全体を統制すること」はできません。

例えば、「法律を守りなさい」と一方的に言うだけで、「法律を守る必要性」をしっかりと理解させなければ、その人は「法律を守る必要性」を理解していないので、「『法律を守る必要性』をしっかりと理解している人」と比べると、簡単に「法律」を破ってしまいますし、「法律」に違反しても、あまり「罪悪感」を感じません。

また、「『法律を守る必要性』を理解していない人」が「法律」に従っていたとしても、それは、「単に『言われたとおりに行動している』状態」「『ただ、何となくそうしている』状態」で、「『確信を持って行動している』状態」ではないので、周りの人が「法律」を破っているのを見たり聞いたりすると、その影響を受けやすく、流されやすいですし、気分次第で「法律」を守ったり、破ったりしてしまいます。

また、「『法律を守る必要性』を理解していない人」を、単に「刑罰」を強化することによって「法律」に従わせようとしても、その人は、そもそも「法律を守る必要性」を理解していないので、なんとか「法律の抜け穴」を探して、それから逃れようとしたり、表面だけ取りつくろって、「法律に従っている」ように見せかけたりするようになってしまいます。

このように、「全体を構成する人」は、「『全体のルール』に従う必要性」をしっかり理解していなかったら、進んで「全体のルール」に従うことはないのです。

それどころか、場合によっては、なんとかして「全体のルール」から逃れようとするのです。

ですから、「全体を統制する」ためには、「『全体のルールに従う必要性』をしっかり理解させる」必要があるのです。

「一方的に言う」とか「単に伝える」ということではなく、「しっかり理解させること」が必要なのです。

さて、これらのことから分かるように、「全体を統制する」ためには、「全体を統制するための教育」をしっかりと行なう必要があるのです。

「全体を統制する」ためには、「全体のルール」をつくる必要がありますが、「全体を構成する人」は、「全体のルール」をつくっただけでは、その「ルール」に従いません。

ですから、「全体のルール」をつくったら、次に、「全体を統制するための教育」をしっかりと行なう必要があるのです。

「信賞必罰」を行なう

※ここで言う「賞」とは、『『全体の目的を実現させるための働きかけを行なった人』に対して『感謝し、報いる』という意味で与えられるもの』のことで、「金品」「名誉」「地位」「待遇」、また「褒めること」「褒め称えること」「お礼を言うこと」

等のことです。

また、「罰」とは、「『全体のルールに違反した人』に対して行なわれるもの」のことで、一般的な意味での「罰」、また「注意すること」「叱ること」等のことです。

また、「信賞必罰」とは、「功績があれば必ず『賞』を与え、罪があれば必ず『罰』すること」「『賞罰』のけじめを厳正にし、確実にそれを行なうこと」という意味です。

「信賞必罰」は、「組織をまとめる」上で、とても重要なことだと言われています。

なぜなら、「賞罰」が確実に行なわれず、「功績」があっても「賞」が与えられないなら、人は「頑張ろう」という「意欲」をなくしますし、罪を犯しても「罰」せられないなら、人は平気で悪事を企むようになるからです。

「全体を統制する」ためには、「信賞必罰」を行なう必要があります。

先ほど説明したように、「全体を統制する」ためには、まず「全体のルール」をつくります。

そして、「全体を統制するための教育」をしっかりと行ないます。

この「『全体を統制するための教育』をしっかりと行なうこと」が、「全体を構成する全ての人」を「全体のルール」に従わせる上で根本的に重要なのですが、いくら「全体を統制するための教育」を行なっても、中には、「それをうまく理解できない人」や「理解しても『全体のルール』に従わない人」がいます。

また、人間は、誰も完璧ではないので、誰でも「間違い」や「失敗」をすることがあります。つまり、意図的ではなくても、「全体のルール」に違反することがあります。

このように、「全体を統制するための教育」をしっかりと行なっても、それだけでは、「『全体を構成する全ての人』を『全体のルール』に従わせること」はできないので、「全体を統制する」ためには、「『全体を統制するための教育ではカバーできな

い部分』を補うもの」が必要になります。

この「『全体を統制するための教育ではカバーできない部分』を補うもの」が、「賞」と「罰」です。

「全体を構成する全ての人」を「全体のルール」に従わせるためには、まず、「全体を統制するための教育」をしっかりと行ないます。

そして、「『全体を統制するための教育』ではカバーできない部分」を「賞」と「罰」で補うのです。

さて、すでに説明したように、「全体を構成する全ての人」は、「『全体の目的を実現させる活動』の『一部分』を担っている状態」で存在しています。

「『全体の目的を実現させる活動』の『一部分』を担っている状態」で存在しているのが、「全体を構成する人」の「本来の姿」「あるべき姿」なのです。

ですから、「全体を構成する全ての人」は、「賞」が「得られる」「得られない」にかかわらず、また、「罰」を「受ける」「受けない」にかかわらず、「自

分の役割」は、常に、しっかり果たさなければなりません。

「『賞』が得られなければ『自分の役割』をしっかり果たさない」「『罰』を受けなければ『自分の役割』をしっかり果たさない」というのは、明らかに間違った考えなのです。

ですが、その一方で、「『全体の目的を實現させるための働きかけ』を行なった人」「全体に貢献した人」に対して「感謝」し、「『賞』を与えて報いる」のは、とても重要なことだと言えます。

また、人は誰でも、「賞が得られる」と思えば「意欲」がわきますが、それはそれで、自然なことです。

また、「罰」を用意すれば、誰でも、「罰」を受けないように「用心」して行動しますが、それも当然のことです。

これらのことから分かるように、「賞」には「『人間の意欲』を引き出す効果」がありますし、「罰」

には「『全体のルールに違反する行為』を抑止する効果」があるのです。

ですから、「賞」と「罰」を有効に活用すれば、つまり「信賞必罰」を行なえば、「『全体の目的を実現させるための働きかけ』をする意欲」を引き出すと共に、「『全体のルール』に違反する行為」を抑止することができるのです。

つまり、「信賞必罰」を行なえば、「『全体を統制するための教育ではカバーできない部分』を補い、『全体を構成する全ての人』を十分に『全体のルール』に従わせること」ができるのです。

さて、この「信賞必罰」を行なう（「賞」と「罰」を有効に活用する）ためには、いくつかのことに注意する必要があります。

「信賞必罰」とは、「功績があれば必ず『賞』を与え、罪があれば必ず『罰』すること」なので、「賞」と「罰」は、「『行なうべきとき』には必ず行なう」のが「鉄則」です。

人は誰でも、「親しい人」には甘く、「嫌いな人」

には厳しくなりがちです。

人によっては、それを当然のことだと思ふかもしれませんが、「賞罰」の適用に「私心」をはさみ「公正」に行なわなかったら、いずれ「信用」を失い、「全体を統制すること」はできなくなります。

ですから、もし「罰するべき」なら、たとえ、「愛する人」「友人」「身内」「年上」でも「罰」しなければなりませんし、「賞を与えるべき」なら、たとえ、「嫌いな人」「利害が対立する人」「一度も話したことがない人」でも、「賞」を与えなければなりません。

自分の「感情」に基づくのではなく、「客観的基準」に基づいて考え、「『行なうべきとき』には必ず行なう」のが「信賞必罰」なのです。

また、「賞」と「罰」を有効に活用するためには、「行なうべきタイミング」で行なう必要があります。

「賞」も「罰」も、「行なうべきタイミング」で行なわなければ、十分な効果は得られません。

「行なうべきタイミング」から、あまりにも時間が経っていたら効果は薄れますし、早すぎても効果は得られないのです。

「『賞』と『罰』を行なうタイミング」は、どちらかと言えば早い方がいいですが、あくまで、「行なうべきタイミング」で行なう必要があるのです。

また、「賞」と「罰」を有効に活用するためには、「『賞罰を適用する基準』を正しくし、常に一定にする」必要があります。

「賞罰を適用する基準」が間違っていたら、「正しいこと」をして「罰」を受け、「間違ったこと」をして「賞」を得ることになるので、「全体を構成する全ての人」の行動がデタラメになり、「全体の目的」を実現させることができなくなります。

また、「賞罰を適用する基準」が一定でなく、そのときによって変わるなら、何が「正しいこと」で、何が「間違っていること」なのかが分からなくなるので、「全体を構成する人」は、「罰」を恐れて、積極的に行動しなくなります。

また、「賞罰を適用する基準」を頻繁に変えると、「まとめられる立場の人」は、「全体をまとめる立場の人」を信用しなくなり、その指示に従わなくなります。

ですから、「賞」と「罰」を有効に活用するためには、「『賞罰を適用する基準』を正しくし、常に一定にする」必要があるのです。

また、人によっては「賞罰」を行なうことを躊躇しますが、「客観的」に考えて「行なうべき」なら、自信を持って堂々と行なわなければなりません。

例えば、「褒めること」や「お礼を言うこと」を「言いにくい」「恥ずかしい」と考えて躊躇したり、「注意すること」や「叱ること」を「怖い」「めんどくさい」と言って、「行なうべき」なのに行なわなかったりしたら、「全体を統制すること」などできません。

また、「『賞罰』を行なう目的」は「全体を統制するため」ですから、もし「全体を統制する」ために必要なら、「賞」も「罰」も十分に行なう必要があ

ります。

つまり、「正当な理由」があるなら「賞」を重くしてもかまいませんし、必要であるなら、「罰」を重くすることをためらってはいけないのです。

厳しすぎる必要はありませんが、「全体を統制する」ためには、ときには「断固とした態度」を示す必要もあるのです。

中国の歴史に管仲という人物がいますが、彼は次のように言います。

「正当な『褒賞』は浪費ではない。正当な『刑罰』は暴虐ではない。『信賞必罰』こそ最高の徳である」と。

このように「賞」と「罰」は、「客観的」に考えて「正しい」なら、自信を持って堂々に行なうべきものなのです。

また、「賞」と「罰」は、「全体を構成する全ての人」を「全体のルール」に従わせる上で有効ですが、あくまで、『全体を統制するための教育』で導き、『全体を統制するための教育ではカバーでき

ない部分』を『賞』と『罰』で補う」という考え方が重要です。

「教育」と「賞罰」では、どちらかといえば「賞罰」の方が簡単に行なえるので、人によっては安意に「賞罰」に頼ってしまいますが、「賞罰」は有効に活用しなければ、かえって、「全体を統制すること」ができなくなります。

例えば、必要以上に「賞」を与えると、人は「賞を受けること」に慣れ、「賞を受けることに対する『喜び』や『有り難み』」が薄れたり、「『賞が得られなければ、全体の目的を実現させるための働きかけをしない』という考え」を持つようになってきます。

また、必要以上に「罰」を与えると、「罰を受けること」に慣れ、「罰」せられても反省しなくなったり、反発したりするようになります。

また、必要以上に「罰則」を強化すると、「罰せられないように行動すること」だけを考えるようになり、「自主性」「やる気」「正しいことを行なう意欲」等をなくしてしまいます。

また、「全体を統制するための教育」をしっかり行なわずに（「全体のルールに従う必要性」をしっかり理解させずに）「罰」を用いると、その人は、「『全体のルール』に従う必要性」を理解していないので、「無理矢理従わされている」と思い、「逆恨み」をするようになります。

ですから、「全体を統制するための教育」をしっかり行なわずに「賞罰」に頼ると、「全体を統制すること」ができなくなるのです。

ですから、「賞」と「罰」を有効に活用するためには、「『全体を統制するための教育』で導き、『全体を統制するための教育ではカバーできない部分』を『賞』と『罰』で補う」という考え方が重要になるのです。

さて、これらのことに注意して「信賞必罰」を行なうことによって、「『全体を統制するための教育ではカバーできない部分』を補い、『全体を構成する全ての人』を十分に『全体のルール』に従わせること」ができるのです。

「全体を構成する全ての人」を「全体のルール」に従わせるためには、「全体を統制するための教育」

をしっかり行なうことが根本的に重要です。

ですが、それだけでは、「『全体を構成する全ての人』を十分に『全体のルール』に従わせること」はできないのです。

ですから、「全体を統制する」ためには、「信賞必罰」を行なう必要があるのです。

「抑止力」を有効に活用する

※ここで言う「抑止力」とは、「活動をやめさせる力」「思いとどまらせる力」という意味です。

また、「『抑止力』を有効に活用する」とは、「抑止力を、自分や自分達の『間違い』『失敗』『過ち』を未全に防ぐために『意図的』に用意し、活用する」という意味です。

「全体を統制する」ためには、まず、はじめに「全体のルール」をつくります。

そして、「『全体を統制する』ための教育」をしっかりと行ないます。

そして、「『全体を統制するための教育』ではカバーできない部分」を「信賞必罰」で補います。

「全体」は、これらを行なうことによって「統制すること」ができますが、「抑止力」を有効に活用することによって、「より確実に統制すること」ができるようになります。

意識していない人は、気付いていないかもしれませんが、私達の周りには、様々な「抑止力（抑止効果があるもの）」があります。

例えば、「刑罰」は、人に犯罪を思いとどまらせる効果があるので、「刑罰」は犯罪行為に対する「抑止力」だと言えます。

また、「宗教」に入っている人には、「その宗教の存在」や「教え」が、「悪い行ない」を思いとどまらせる「抑止力」になっています。

また、子供が「親に怒られたくないからイタズラをしない」と言うなら、「親の存在」が子供に対して「抑止力」になっていると言えます。

また、「努力目標」や「自分を奮い立たせる言葉」を紙に書いて、目につくところに貼る人がいますが、この「自分を奮い立たせるもの」も、自分の「弱さ」や「怠惰」を「抑止」していると言えます。

このように、私達の周りには、様々な「抑止力」があるのです。

「抑止力」と言うと、「何か特別な大きなもの」を想像するかもしれませんが、ここに挙げたような身近にあるものも、「抑止力」として十分に機能しているのです。

さて、「全体をより確実に統制する」ためには、この「抑止力」を活用する必要があるのですが、そのためには、「抑止力」を「自分や自分達の『間違い』『失敗』『過ち』を未全に防ぐために『意図

的』に用意するもの」として捉える必要があります。

「抑止力」には、「相手を牽制する」「相手にプレッシャーを与える」という側面がありますが、「相手を牽制するだけ」「相手にプレッシャーを与えるだけ」では、「対立」が生まれ、深まるだけなので、「全体を統制すること」はできなくなります。

逆に、「抑止力」を、「自分や自分達の『間違い』『失敗』『過ち』を未全に防ぐために『意図的』に用意するもの」として捉え、活用すれば、「全体を構成する全ての人」の「間違い」「失敗」「過ち」を未然に防ぎ、最小限に抑えることができるので、「全体をより確実に統制すること」ができます。

例えば、「抑止力」を有効に活用すれば、「家族をより確実に統制すること」ができます。

「家族」においては、「子供」に対しては「親」が、「夫」に対しては「妻」が、「妻」に対しては「夫」が「抑止力」になり得ます。

ですが、「家族」における「抑止力」は、法律で決められているわけでも、誰かに強制されている

わけでもないのに、相手の目を盗んで「自分勝手な行動」をしようと思えば、いくらでもできてしまいます。

ですから、特に「家族」において「抑止力」を活用するときには、「抑止力」を、「自分や自分達の『間違い』『失敗』『過ち』を未全に防ぐために『意図的』に用意するもの」として捉える必要があります。

例えば、相手のことを、「自分の『間違い』『失敗』『過ち』を客観的な立場から指摘してくれる人」として捉えます。

そうすると、相手が「自分に対する抑止力」であることが分かります。

そして、互いに相手の「抑止力」となり、互いに相手の意見に素直に耳を傾けるようにすれば、自分や自分達の「間違い」「失敗」「過ち」を最小限に抑えることができるのです。

つまり、「家族をより確実に統制すること」ができるのです。

人間は、誰も完璧ではないので、「抑止力」がな

い状態で、常に、自分に甘えず、自分を厳しく律し続けるのは簡単ではありません。

ですが、「抑止力」を「自分や自分達の『間違い』『失敗』『過ち』を未全に防ぐために『意図的』に用意するもの」として捉え、活用すれば、自分の力のみで自分を律し続ける場合よりも、はるかに少ない労力で、自分を律し続けることができるのです。

ですから、「抑止力」を有効に活用すれば、「家族をより確実に統制すること」ができるのです。

また、「会社」も「抑止力」を有効に活用すれば、「より確実に統制すること」ができます。

「会社」は、常に一定の利益を出し続けなければ「存続させること」ができませんし、活動には金銭等の利益がからみますし、「会社」によっては規模がとてもの大きいので、「抑止力」を活用しなければ、「会社を統制する」のは困難です。

ですから、特に大きな「会社」においては、実際に、様々な「抑止力」を活用して「会社」を「統制」しています。

例えば、「会社」によっては、「監査役会」「取締役会」「内部監査部門」があり、「監査役会」が「取締役会」を、「取締役会」が「経営者」を、「内部監査部門」が「業務部門」をそれぞれ抑止（監査）しています。

また、「労働組合」の存在も「経営者」を抑止している側面があります。

また、「独占企業」のように「同業他社」が存在しないと、「業務の効率化」が行なわれにくいですし、「商品価格」「サービス料」等を不当に操作することも簡単にできてしまうので、「同業他社」の存在も「抑止力」になっていると言えます。

また、「会社全体」「部署」「グループ」等においては、「まとめる立場の人」が「まとめられる立場の人」に対して「抑止力」になっているはずです。

このように、「会社」の場合、「会社」の内部や外部に、そして法的に、あるいは自主的に、「抑止効果がある『役職』『部署』『組織』等」を存在させているのです。

ですが、「会社」においても、「抑止力」を活用するときには、「抑止力」を、「自分や自分達の『間違い』『失敗』『過ち』を未全に防ぐために『意図的』に用意するもの」として捉える必要があります。

つまり、「抑止力」になっている「人」や「部署」や「組織」のことを、「自分や自分達の『間違い』『失敗』『過ち』を客観的な立場から指摘してくれる人達」と捉え、その「指摘」や「忠告」には、素直に耳を傾ける必要があります。

「抑止力」を用意しても、「会社を構成する全ての人が、「自分」や「自分が所属している部署」のことだけを考えて行動し、「抑止力」になっている「人」や「部署」や「組織」の「指摘」や「忠告」を無視していたら、その効果は得られません。

ですから、「会社」においても、「抑止力」を活用するときには、「抑止力」を「自分や自分達の『間違い』『失敗』『過ち』を未全に防ぐために『意図的』に用意するもの」として捉える必要があります。

「会社」も、「抑止力」をこのようなものとして捉え、活用することによって、「より確実に統制すること」ができるのです。

また、「国家」においても同じことが言えます。

「国家」は規模がとても大きな「全体」なので、どの「国家」でも、「抑止力」を活用して「国家」を「統制」しています。

例えば、日本では、「司法」「立法」「行政」を分離し、権力が一つの機関に集中するのを防ぐとともに、それぞれが、互いに他の機関の「間違い」「失敗」「過ち」を「抑止」するようにしています。

また、「国家」には「法律」があり、「法律に違反した人」には「刑罰」が科せられますが、これは、「刑罰」によって、「国家を構成する全ての人」の「間違い」「失敗」「過ち」を「抑止」しているということです。

このように、「国家」は、「抑止力」を活用して「統制」されているのですが、「国家」においても、「抑止力」を活用するときは、「抑止力」を、「自分や自分達の『間違い』『失敗』『過ち』を未全に防ぐために『意図的』に用意するもの」として捉える必要があります。

「司法」「立法」「行政」が分離していることを、「それぞれの『間違い』『失敗』『過ち』を未全に防ぐために『意図的』に分離させている」と捉えず、単なる「対立関係」と捉えていたら、それぞれが根本から「対立」することになり、「国家を統制すること」ができなくなります。

また、「刑罰」を、「『国家を構成する全ての人』の『間違い』『失敗』『過ち』を未全に防ぐために『意図的』に用意するもの」として捉えず、単なる「国民の行動を制限するもの」として捉えていたら、素直に「法律」に従う気になれないので、やはり、「国家を統制すること」に支障をきたします。

ですから、「国家」においても「抑止力」を活用するときには、「抑止力」を、「自分や自分達の『間違い』『失敗』『過ち』を未全に防ぐために『意図的』に用意するもの」として捉える必要があるのです。

「国家」も、「抑止力」をこのようなものとして捉え、活用することによって、「より確実に統制すること」ができるのです。

さて、これらのことから分かるように、「全体」は、「抑止力」を有効に活用することによって、「より確実に統制すること」ができるのです。

「抑止力」には、「相手を牽制する」「相手にプレッシャーを与える」という側面があるので、人によっては、「抑止力」を「相手を牽制するため」「相手にプレッシャーを与えるため」だけに使ってしまう。

ですが、それでは「対立」が生まれ、深まるだけなので、「全体を統制すること」はできないのです。

逆に、「抑止力」を、「自分や自分達の『間違い』『失敗』『過ち』を未全に防ぐために『意図的』に用意するもの」として捉え、活用れば、「全体を構成する全ての人」の「間違い」「失敗」「過ち」を未然に防ぎ、最小限に抑えることができるので、「全体をより確実に統制すること」ができるのです。

「誰かを抑止する」「誰かに抑止される」ということではなく、「自分や自分達の『間違い』『失敗』『過ち』を未全に防ぐために『意図的』に用意し、活用する」というのが、「『抑止力』の有効な活用の仕方」なのです。

人間は誰も完璧ではないので、「抑止力」がない状態で、常に、自分を一定の状態に律し続けるのは簡単ではありません。

ですが、「抑止力」を有効に活用すれば、自分の力のみで律し続ける場合よりも、はるかに少ない労力で、自分を律し続けることができます。

ですから、「抑止力」を有効に活用すれば、「全体をより確実に統制すること」ができるのです。

さて、ここまで、「『全体を統制する』ために必要なこと」について説明してきました。

「全体を統制する」ためには、まず、「全体のルール」をつくります。

そして、「全体を統制するための教育」をしっかりと行ないます。

そして、「『全体を統制するための教育』ではカバーできない部分」を「信賞必罰」で補います。

そして、「抑止力」を有効に活用することによって、「全体をより確実に統制する」のです。

まとめ

それでは、ここで、三章の「まとめ」をしたいと思います。

「大和思想」は、「『世の中の全ての人が、自ら率先して、普段自分が関わっている全体をまとめること』によって、『共存共栄の世の中』を実現させ、世の中の全ての人と共に『幸福』になる」という「思想」です。

ですから、「大和思想」においては、「普段自分が関わっている『全体』をまとめること」が根本的に重要です。

また、「普段自分が関わっている『全体』をまと

める」ためには、「全体の構造（全ての『全体』に共通して備わっている『全体の構造の中核を成す部分』）」をしっかりと理解する必要があります。

そこで、三章では、「全体の構造」について説明しました。

三章で説明したことをまとめると、次のようになります。

「全体」＝「『共通の目的を持った人』の集まり」

「全体の構造」の「基礎」＝「目的」「複数の人」
「システム」

これらのうち、「複数の人（全体を構成する全ての人）」は、「『全体の目的を実現させる活動』の『一部分』を担っている状態」で存在している。

また、「複数の人（全体を構成する全ての人）」は、「まとめる側（まとめる立場）」と「まとめられる側（まとめられる立場）」に分かれている。

「複数の人（全体を構成する全ての人）をまとめる』ためのシステム」＝

「役割分担」と「適材適所」をしっかりと行なう

「全体を構成する全ての人」が「優先順位が一番」を「全体」にする

「全体を構成する全ての人」が「主体性」を持ち、かつ、「互いに協力し合う」

「全体を構成する全ての人」が「自分の役割」をしっかりと果たす

「全体を構成する全ての人」をしっかりと育てる（教育をしっかりと行なう）

「全体のルール」をつくる

「全体を統制するための教育」をしっかりと行なう

「信賞必罰」を行なう

「抑止力」を有効に活用する

これが、「全体の構造（全ての『全体の構造』の中核を成す部分）」なのです。

世の中には様々な「全体」があり、それぞれには、それぞれの「構造」がありますが、全ての「全体の構造」の中核には、この「全体の構造」があるのです。

さて、「大和思想」においては、「普段自分が関わっている『全体』をまとめること」が根本的に重要ですが、実際に、「普段自分が関わっている『全体』をまとめる」ためには、この「全体の構造」をしっかりと理解している必要があります。

世の中には様々な「全体」があり、それぞれには、それぞれの「構造」があるので、実際に「全体をまとめる」ためには、ここで説明したことだけでなく、「その全体の構造」をしっかりと理解する必要があります。

ですが、ここで説明した「全体の構造」は、「全ての『全体の構造』の中核を成す部分」なので、ど

のような「全体」を「まとめる」場合でも、しっかり理解している必要があるのです。

特に、「『複数の人（全体を構成する全ての人）をまとめる』ためのシステム」は、どのような「全体」を「まとめる」場合でも重要です。

どのような「全体」でも、「『全体を構成する全ての人』をまとめる」ためには、それらをしっかり行なう必要があるのです。

また、この「全体の構造」を理解する必要性は、「全体が、まとまっているとき」には理解できないかもしれませんが、「全体が、まとまらなくなったとき」、特に、「『どうすることもできないほど』まとまらなくなったとき」には理解できるはずで

す。なぜなら、「全体が、まとまらなくなったとき」は、「その全体のあり方」を根本から見直す必要があるからです。

つまり、ここで説明した「全体の構造」を踏まえて、「その全体のあり方」を根本から見直さなけ

れば、その「全体」を立て直すことはできないからです。

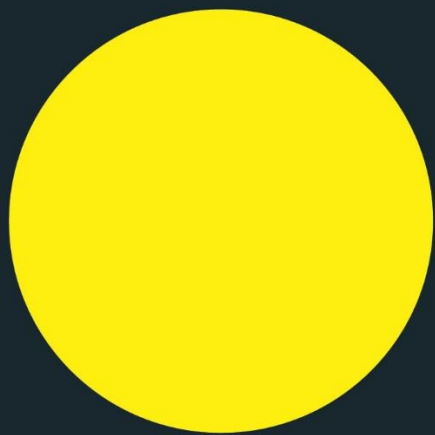
これらのことから分かるように、ここで説明した「全体の構造」をしっかりと理解することは、「普段自分が関わっている『全体』をまとめる」上で、とても重要なことなのです。

ここで説明した「全体の構造」は、どのような「全体」を「まとめる」場合でも必要となる、「全体の設計図」です。

「家族」「友人の集まり」「学校」「会社」「国家」、その他、どのような「全体」を「まとめる」場合でも、この「全体の設計図」が必要になるのです。

ですから、ここまでの説明で、「よく分からなかった点」「理解できなかった箇所」があるなら、何度でも読み返して理解を深めてください。

そして、あなたの頭にある「全体の設計図」を、より明確にしてほしいと思います。



やまと

しそろう

三章